

# 学内広報

for communication across the UT



特集：

平成19年度役員紹介

平成18年度卒業式・平成18年度学位記授与式

平成18年度第2回「総長賞」「総長大賞」授与式

知のプロムナードデザインコンペ



130<sup>TH</sup>  
THE UNIVERSITY OF TOKYO

2007.4.11

No. 1355

平成19年度役員を以下のとおり、紹介します。

総長

小宮山 宏

<任期>平成17年4月1日～平成21年3月31日

理事（副学長）

岡村 定矩

（担当）研究 情報システム 環境安全

（任期）平成19年4月1日～平成20年3月31日

理事

山田 興一

（担当）産学連携 調達 企画推進  
バリアフリー 渉外・基金（副）

（任期）平成19年4月1日～平成20年3月31日

理事（副学長）

西尾 茂文

（担当）財務 施設・キャンパス 病院・保健センター  
総合研究博物館

（任期）平成19年4月1日～平成20年3月31日

理事

上杉 道世

（担当）人事労務 事務組織 業務改善 法務・倫理  
男女共同参画

（任期）平成19年4月1日～平成20年3月31日

理事（副学長）

濱田 純一

（担当）総務 人事（教員） リスク・マネジメント  
監査 広報 情報（コンテンツ関連） 130周年

（任期）平成19年4月1日～平成20年3月31日

副学長

平尾 公彦

（担当）教育（大学院） 学生 留学生 卒業生  
国際 研究（企画） バリアフリー 病院

（任期）平成19年4月1日～平成20年3月31日

理事（副学長）

浅島 誠

（担当）教育 学生 留学生 卒業生 国際

（任期）平成19年4月1日～平成20年3月31日

監事

石黒 光

（任期）平成18年4月1日～平成20年3月31日

監事

漆館 日出明

（任期）平成18年4月1日～平成20年3月31日

理事（副学長）

高橋 宏志

（担当）渉外・基金 評価 入試 研究（文系）  
ハラスメント対応 附属図書館

（任期）平成19年4月1日～平成20年3月31日

副理事

藤井 博英

（担当）渉外・基金

（任期）平成19年4月1日～平成20年3月31日

## 新役員の紹介

平成19年4月1日付けで就任された役員を、以下のとおり、ご紹介します。



理事(副学長)  
浅島 誠

昭和48年3月 大学院理学系研究科博士課程修了  
平成5年4月 教授(教養学部)  
平成15年2月 大学院総合文化研究科長・教養学部長  
平成17年10月 日本学術会議副会長、本学生命科学教育支援ネットワーク長、大学院総合文化研究科生命科学構造化センター長

所属：生命環境系

専門分野：発生生物学、動物科学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

Roux's Archives of Developmental Biology 198(1990) 330-335. Pro NAS(USA) 88(1991) 6511-6514. Development 127(2000) 5319-5329. Cell 120(2005) 857-871. Nature Cell Biology 8(2006) 501-508. など、原著論文 257編

『発生のしくみがみえてきた』岩波書店、『分子発生生物学』裳華房、『新しい発生生物学』講談社など



理事(副学長)  
高橋 宏志

昭和46年6月 法学部卒業  
昭和60年8月 教授(法学部)  
平成16年4月 大学院法学政治学研究科長・法学部長  
所属：実定法  
専門分野：民事訴訟法  
研究内容(著書)：  
『重点講義 民事訴訟法(上・下)』有斐閣



副学長  
平尾 公彦

昭和49年3月 京都大学大学院工学研究科博士課程修了  
昭和63年4月 名古屋大学教養学部 教授  
平成5年5月 本学教授(工学部)  
平成16年4月 大学院工学系研究科長・工学部長  
所属：化学  
専門分野：理論化学、計算量子化学  
研究内容：電子状態理論

## 役員就任の挨拶

このたび就任された理事(副学長)および副学長の、就任に当たっての挨拶を、以下のとおり、掲載します。

### 就任にあたって

理事(副学長) 浅島 誠

副学長・理事として「教育」、「学生」、「留学生」、「卒業生」と「国際」を担当することになります。定年退職直後に東京大学の運営の最前線の大役に駆り出されることになりましたが、微力ではありますが尽力いたします。

上記の業務については、前任の古田・佐藤両副学長・理事から引き継ぎを行い勉強中ではありますが、前任者の業務を滞りなくかつ、スムーズに移行したいと思っています。これらの中の教育は大学の柱の一つであり、教育の質をどのように更に高めていくのか、学部(前期・後期)、大学院の各々のレベルにおいて今、再評価がなされています。その中で、私は主として学部レベルを担当し、大学院は平尾副学長にお願いすることになっています。学生によりよい学問の場を提供すると同時に、意欲のある学生には更に向上できるシステムづくりも考えていきたいと思っています。

又、今年は東大創立130周年の記念の年で、東大の学内外のみならず国際的にも更に大きく発展し、展開を上げようと様々な企画がなされています。そのような運営には、大学構成員である教職員の方々の御協力なくしてはなしえないものと思っています。理事として心に留めておきたいことは、現場感覚を失わないようにしながら、学生や教員により良い教育と研究の環境をつくり、教職員の方々の御協力を得て、魅力があり、活力のでる大学づくりに努めたいと思っています。それゆえ、教育や研究の現場にいる先生方、また、大学運営を行って下さっている教職員の方々の御意見にも耳を傾けていきたいと思っています。次世代を担う優れた国際的な人材育成を継続的に行うことも又、東京大学に求められていることだと思っています。これらのことを踏まえつつ、多くの問題について優先度に応じて対応し、取り組んで一つ一つ着実に解決していきたいと思っています。

### 研究科長に続いて

理事(副学長) 高橋 宏志

私は、3月末まで法学政治学研究科長をしておりました。研究科長から、いきなり理事・副学長となった次第であります。ですから、まだまだ部局長時代の発想から抜け出しておりません。もともと、研究科長も、自分の研究科のことだけを考えているわけではありません。研究科長なりに東京大学全体のことを考え、それと自分の研究科のこととの調和・調整に腐心しているはずであります。私の知る多くの研究科長は、そうでした。従って、理事・副学長となったからといって、途端にまったく別の発想をする必要はないものと思っております。

そうはいつても、私は研究科長として、総長が言われる自律分散協調系のうち自律を心がけて参りました。部局の自律がなければ協調もあり得ない道理ですから、部局長は自律に重心が傾くことになります。それに対して、理事・副学長は、自律分散協調系のうち協調に力点が移ることになるでしょう。大学本部にいる以上、そうなることは自然であります。けれども、折角、研究科長に連続して就任した理事・副学長なのですから、研究科長時代の発想も大事にしてみたいと思っています。たとえば、東京大学全体の情報をできるだけ部局長に伝えること、部局長の頭越しに部局の教員を大学本部に一本釣りにしないこと、研究科長とよく対話すること、などがすぐ思い付きます。ただし、眉をひそめなくなる部局のエゴを研究科長時代に見聞してきた私は、部局の味方でもないはずで。

渉外、評価、入試、ハラスメント、文系研究、附属図書館が私の担当です。どれも難問であり、また、私の得意分野ではありません(文系研究も、法学政治学研究以外は門外漢にすぎません)。しかし、なった以上は、適度に頑張る所存です。適度に、と限定することをお許し下さい。見事に散るのは櫻だけでよいと思っています。

### 就任に当たってのご挨拶

副学長 平尾 公彦

工学系研究科長の任期を終えた後はゆっくりと学問を楽しむつもりだったのに、また最前線に駆り出されてしまった。研究者として残された時間を考えると、何となく寂しい。

いまGoyaに夢中である。スペインで開催される国際会議やシンポジウムから招待を受ければ、よほどのことがない限り、引き受けている。もう10回以上もスペインを訪れている。もちろん目的は学会よりもGoyaにある。プラド美術館をはじめとして、おまな美術館には何度も足しげく通った。最近はおまな地方の美術館めぐりをしている。フランス国境の教会にある1枚のGoyaを見るために長時間の列車の旅もした。Goyaに夢中になるとGoyaに関することは何でも集めたい。毎年、秋には神田古本市でGoyaに関する本や画集を買いもとめている。最近では私のGoyaぐるいはすっかり有名になり、私を訪れる外国からの客はGoyaの版画集を見つけたのといって土産として持ってきてくれる。ある古本屋に素晴らしいGoyaの画集がある。15万円以上もする高価なもので、何とか手に入れたいと思っているが、いまだにその夢を果たせないでいる。

法人化以降、東京大学はvisibleになった、実にたくましくなった。国際的な知名度もあがり、名実ともに世界のトップクラスの大学仲間入りしつつある。小宮山総長の強いリーダーシップによるものである。先頭に立つ東大をさらに強くすることは、わが国の学術の水準を引き上げる意味からも重要である。だが東大にはもう一つの使命がある。リーダーとしての東大はわが国の高等教育の在り方にも責任を負っている。法人化後、地方大学は厳しい状況に置かれている。有力大学と地方大学の格差が固定化、拡大されつつある。このままでは日本の学術や高等教育はどうなるのだろうかかと危ぶむ声も多い。東京大学の責任は大きい。

例のGoyaの画集を手に入れてゆっくり楽しむのはもう少し先にしようと考えている。しばらくは東京大学のために微力を尽くすつもりである。

## 役員退任の挨拶

このたび退任された理事(副学長)および副理事の、退任に当たっての挨拶を、以下のとおり、掲載します。

### 退任の挨拶

前理事(副学長) 古田 元夫

私は、佐々木総長のもとで1年、小宮山総長のもとで2年、教育と学生に関わる分野を副学長として担当しました。法人化後に総長のリーダーシップが強力になったといっても、教育・学生という分野は、その現場である各部局の理解なくしては、ほとんど何もできない分野です。ここで、私がこの3年間にある程度の仕事をさせていただくことができましたのは、ひとえに各学部・研究科のご理解とご協力のおかげであり、この機会に厚く御礼を申し上げたいと思います。

法人化後に発足した教育運営委員会という委員会があります。この委員会はすべての学部長・研究科長が参加する、教育関係ではもっとも重要な全学委員会です。法人化後には科所長会議の議題があまりに多くなり、議論がしにくくなりました。この分、教育運営委員会での議論は活発で—これは教育運営委員会の長をつとめた私の被害妄想かもしれませんが—、教授会の議論が沸騰することがしばしばある教養学部の学部長を経験して議論百出の会議には相対的に慣れているはずの私にとりましてスリル満点の会議が数多くございました。ただ、教育とか学生をめぐって激しい議論がないような大学は大学ではないと思いますので、私にとって教育運営委員会がスリル満点だったというのは、東京大学としてはまことに健全であったということかと思えます。

さて、私の担当が教育・学生であったため、研究所とはあまり接点がなかったのですが、この1年は学術雑誌購入の共通経費化や助教問題などで、研究所長の先生方にも、たいへんお世話になる機会が増えました。また、本部職員の皆さんとも、いっしょに新しい大学をつくる貴重な体験を共有させていただきました。

東京大学の変革期に、私自身、きわめて多くの勉強をさせていただきましたことを、改めて感謝したいと思います。

### 私擬『東京大学アクション・プラン』の勧め

前理事(副学長) 佐藤 慎一

私は2001・02年度に人文社会系研究科長を務め、東京大学の管理運営の仕組みについて相当のことは知っていたつもりでしたが、わずか5年前の経験が、理事の仕事を行なう上でもはや殆ど役に立ちませんでした。国立大学法人化が東京大学に及ぼした変化がそれほど大きかったということです。

あらゆる変化にはプラスとマイナスの両面があります。国立大学法人化にももちろんプラスとマイナスの両面がありますが、東京大学にとってはプラスが遥かに上回るというのが、理事の仕事を終えた私の実感です。その何よりの象徴が『アクション・プラン 2005-2008』でしょう。大学が自らの作った包括的な行動計画のもとに、自らの責任で改革を進めるということは、東京大学の歴史にいまだかつて存在しないことです。『アクション・プラン』の個々の内容については、もちろん批判があるでしょう。重要なことは、大学が自らの計画に基づいて大学経営を行なうことができるようになり、その意味で大学の自治が強化されたということなのです。もっとも、現実には『アクション・プラン』を読んだことがない教員が過半数を占めると思います。それが大学らしいと言えばそれまでですが、できれば小宮山総長をそれぞれの教授会に招いて肉声で説明を受け、直接総長に質問や批判をすることをお勧めします。既に5つの部局がそのことをおやりですが、大学を活性化させる何よりの方法だと私は思っています。

平穏な環境をお望みの方にはお気の毒ですが、国立大学の変化は今後より大規模により急激に進むと私は予想しています。そのような変化を東京大学にとって意味のある変化にする最善の方法は、あたかも明治10年代に多くの私擬憲法草案が作られたように、多くの部局多くの教職員が、それぞれの私擬『アクション・プラン』を作ることではないでしょうか。『アクション・プラン』の作成は、総長のみならず許された特権ではありません。最後に、理事としての仕事を支えて下さった多くの勤勉で有能な教職員の皆様に、心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

### 東大の仕事

前副理事 石堂 正信

法人化を間近に控えた平成15年12月に東大に参りまして、都合3年と4ヵ月を過ごしました。財務全般が所掌ということで、新会計基準の定着、資金の一括管理、月次決算処理、余裕資金の運用などを手がけました。これと並んで、経費削減の切り札として調達全般の改善に取り組むこととなりました。また、東大に来た当初のやや不用意な発言がきっかけになって(?)、損害保険、コーポレート・カードにもずうっと関わることとなりました。これはまだ財務と深く関係する事柄でしたが、その他にも、上司の暖かいご配慮で(?)、学寮そして国際村建設の仕事も降って参りました。

これらの仕事を通じて一番印象に残ったのは、やはり大学における「部局自治」という伝統の強さであり、恐らくその反映である「指揮命令では動かない組織」という側面でした。ただ、法人化から3年、この部局自治にもある意味では転機が見えてきた、あるいは見えてきつつあるようにも感じました。教育・研究のように大学として断固部局自治を貫く必要のある分野と、全学統一歩調で効率化を求めた方がベターの分野があることへの理解が進んでいくように思います。

先年、ある理事が任期を終えたときの挨拶で、「大学には教育と研究と管理という3つの仕事がある。管理はお掃除当番みたいなもので、誰かがやらねばならない。私はもうお掃除当番をやったので二度とやらないつもりだ。」と言われてました。その意味では、私などは最初から「お掃除当番」のためだけに大学に来たようなものですが、東大が世界のトップを目指すとき、テキパキとしたお掃除当番の働きもまた必要なのだと思います。東大の教員の皆さんはもちろんですが、職員の皆さんもまた大学の共同の「主役」として力強く歩いて欲しいと思います。お世話になり、本当にありがとうございました。

今年は130周年という節目の年にあたっていますから、2007年3月23日というこの日に、皆さんが卒業していくということの意味を、東京大学の歴史の中で考えてみるのも意義のあることでしょう。

今回の卒業式は、この安田講堂での卒業式が復活してから17年目に当たります。卒業式は安田講堂で行うのが当たり前だと思っている皆さんが多いと思いますが、実はそうではありません。1970年代と80年代の約20年間、卒業式は安田講堂で行われていませんでした。なぜそうなったかと言いますと、1968年と1969年、ここに出席している卒業生の大多数の皆さんが生まれる遙か以前のことになりますが、東京大学は、卒業式を行うことができない状況に追い込まれたからです。このときの出来事は、それを語る人の立場に応じて、「東大紛争」と呼ばれたり「東大闘争」と呼ばれたりしますが、この重大な出来事の中で、1968年3月に安田講堂で行われるはずだった卒業式は中止されました。さらに同年7月以降は、この講堂も当時の学生諸君によって封鎖され、教職員は安田講堂のなかに立ち入ることすらできなくなりました。この状態は、翌1969年の1月まで続き、大学はついに機動隊を導入して、安田講堂の封鎖を解除したのです。この事件は日本全国の注目を集め、マスメディアが繰り返し大きく取り上げましたから、占拠した学生とこれを排除しようとした機動隊との衝突を写した映像記録を、あとからご覧になった皆さんも多いかと思います。半ば廃墟と化した安田講堂で卒業式が行われることは、それから20年間ありませんでした。この壇上に座っている先生方の多くも、安田講堂での卒業式を経験していません。

いま皆さんが座っているこの講堂から、その時の出来事を想像することは非常に難しいと思いますが、大学の知のありかたをめぐる非常に厳しい状況が、皆さんが座っているこの同じ場所です。生じたということは記憶しておいてよいと思います。

安田講堂は、安田善次郎の寄付によって、1921年に建設が始まり、関東大震災を経て1925年に完成しました。以後、安田講堂は今日に至るまで東京大学の象徴として存在し続けております。卒業式の中止と再開もその中の出来事です。ですから、いま皆さんが座っているこの安田講堂には、東京大学の歴史が凝縮されています。その中で、私たちの生きている時代がいかなるものであるかということを示す象徴的な出来事を、2つだけ紹介しておきましょう。

第二次世界大戦の末期、戦況が厳しくなり、それまで徴兵が猶予されていた大学生のうち文科系の学生は兵士となることを余儀なくされました。学徒出陣です。1943年の11月には、この安田講堂で出陣する学生諸君のための壮行会が開かれました。

当時の内田祥三（よしかず）総長が、出陣学生たちに激励の挨拶をしたあと、学生諸君は、隊列を組んでこの安田講堂前の銀杏並木を通り、正門から出て皇居まで行進しました。この安田講堂で励まされ、戦地へと向かった出陣学生の多くは、学半ばにして帰らぬ人となり、再び安田講堂に戻って卒業式を迎えることはできませんでした。いまも黄葉を繰り返す銀杏並木はこのときのことについて何も語りませんが、皆さんの先輩はこの同じ銀杏並木を歩いて戦地に赴いたのです。

安田講堂で行われた出陣学徒の壮行会は、東京大学と戦争との関係を示す象徴的な出来事でした。しかし、この同じ安田講堂は、わが国が平和国家として敗戦後の再出発をするに当たっても、きわめて重要な意味を持つ場となりました。

1946年2月11日、敗戦後第1回目の紀元節のときのことです。戦前戦中には紀元節の式典が全国津々浦々の学校で盛大に執り行われていましたが、1946年の元旦に、天皇の人間宣言が出されたこともあって、このとき日本のほとんどの学校は従来からの紀元節の記念式典を中止しました。ところが当時の南原繁総長は、米軍の占領下にありながら日の丸の旗を堂々と正門に掲げて、この安田講堂で敗戦後第1回の紀元節を祝いました。そして「新日本文化の創造」という題の告辞を行ったのです。この告辞の中で南原総長は戦前の偏狭な国家主義を批判し、「国民は国民たると同時に世界市民として自らを形成しうる」ことを示しました。そして、「私は惧れる、わが民族の滅亡は他国の力によるに非ず、自らの無為と無力によって招来されんことを」と述べて、敗戦によって虚脱状態にあった学生たちを励まし、「平和民族として世界の文化と人道に寄与すべきだ」と激励したのです。この告辞は、安田講堂を埋め尽くした学生たちに感銘を与えただけでなく、新聞でも大きく取り上げられ、敗戦で自信喪失していた多くの日本人に勇気を与えました。

いま安田講堂で1940年代から60年代の30年間に起こった3つの出来事に言及しましたが、この30年間はまさに激動の時代でした。それに比べると、現在は、非常に安定した時代のようにも見えます。もちろん現在も学内外に多くの課題が山積しています。しかし、以上の3つの出来事に匹敵するような大事件は、少なくともこの安田講堂を舞台にしては、この30年の間には起こっていません。

しかし、かつての大事件のような華々しきや喧噪はないのですが、現在、静かな変化が進行しているように思われます。現在の大学、日本、そして世界は、グローバル化と呼ばれる現象のなかにあり、その影響をじわじわと受けています。経済の仕組みも製造業を中心にしたものから情報やサービスを中心としたものへと大きく変わりました。家族や企業をはじめとして私

たちが暮らしている社会の仕組み、30年前とはずいぶん変わっています。こうした静かな、しかし着実に鞏固な変化の中で大学を巣立っていく卒業生の皆さんに、私は、次の2つのことを期待したいと思います。

1つは、自律分散協調系としての社会を建設し、その担い手になって欲しいということです。私は、これまで大学という組織は自律分散協調系であるべきだと主張してきました。自律分散協調系という概念はもともと生命体を表現するものです。例えば、人間の身体は、神経器官、運動器官、感覚器官、呼吸器官、消化器官など、様々な諸器官から成り立っています。これらの諸器官は、形態的にはそれぞれ独立しており、身体の様々な場所に分散して存在しています。それだけでなく、これらの器官は自律的に動いています。心臓と肝臓はそれぞれ別個の器官として独立して存在し、それぞれ自律的な動きをしています。ところが、それにもかかわらず、結果として、互いが協調して、生命体としての人間の生存を可能にしているのです。

東京大学という組織も、それぞれの教員の研究室や、研究室の集合体としての研究科や研究所などから成り立っていて、しかもそれぞれが自律的であります。これは企業や役所などの組織とは異なる点です。企業や役所を構成する各ユニットは、多くの場合、上位組織の下部組織という形をとっていますから、あまり自律的だとは言えません。ところが大学を構成する各組織は、伝統的に「学問の自由」や「学部自治」が強調されてきたことからわかるように、自律性が非常に強くなっています。したがって単に自律分散していただだけでは、東京大学の大学としてのアイデンティティが保てません。ですから、身体の諸器官のような協調が重要な意味を持つようになってくるわけです。

しかしよく考えてみると、自律分散協調系という考え方は、大学だけでなく、社会に対しても当てはまるのではないのでしょうか。社会は非常に異質で多様な要素から成り立っていて、しかもそれぞれが独立して自由な動き方をします。まさに自律分散的のです。ですから、社会は、企業組織や行政組織のアナロジーで考えるよりは、大学とのアナロジーで考えた方がよいのです。しかし自律分散的であるだけで、協調の要素がないと、そのシステムは瓦解してしまいます。ですから自律分散協調系として社会をとらえる、という視点が重要となってくるのです。

それだけではありません。多様性のあるシステムの方が環境の変化には適応しやすいということを冒頭で述べましたが、自律分散的であるということはまさに多様性のあるシステムであるということです。したがって社会は、自律分散的であればあるほど環境の変化に適応することが容易であるように思われます。グローバル化のなかで、今日、日々新しい問題が生まれ、その解決を迫られています。社会が自律分散協調系であるということは、環境の目まぐるしい変化に適応するうえでの強みな

のです。

卒業生の皆さんの多くは、これから企業や官庁など大学とは異なったタイプの組織の一員となっていくことでしょう。そうした組織のなかにおける人々の行動の仕方は、大学におけるものとは異なることが多いのです。その意味で、大学におけるものとは異なる行動の仕方を身につける必要があります。しかし企業や官庁を超えた社会全体を考えた場合、それは自律分散協調系としての性格をもっていますから、そこでは、自律分散協調系としての大学において身につけた行動の仕方が大いに役立つと思われるのです。

2つ目の点は、グローバル化した世界のなかで複合的な視点をもって欲しいということです。

ここでいう複合的な視点の一つは、コスモポリタニズムの視点です。グローバル化しつつある世界の中では、自分が所属する共同体や民族や国家に自足するのではなく、それらを超えた地点から物事を考えていかなければなりません。世界中が、「他者を感じる力」をもつことなく、自分の小さな世界のことだけしか考えない人間ばかりになってしまうと、たいへん危険です。異質で多様なものが共生していくためには、コスモポリタニズムの高見に立った視点が必要です。

しかし、コスモポリタニズムの視点に立つ、あるいはグローバルな視点に立つということは、ローカルな視点を捨て去ってよいということの意味しません。私たちが「今ここにいる」という厳然たる事実から逃れることはできないからです。また、グローバル化と呼ばれる現象も、私たちとは縁のないどこか遠いところで起こっているのではなくて、私たちにとって最も身近な場、ローカルな場で起こっています。ですからグローバルにこだわることに同時に、ローカルにこだわることの双方が必要になってきます。

同様に、自分のナショナルリティにこだわると同時に、自分のナショナルリティを超える視点を併せもつことも肝要です。さきほど「国民は国民たると同時に世界市民として自らを形成する」という南原総長の言葉を引きましたが、この言葉には今日でも新鮮な響きがあります。日本人の卒業生であれば、日本人であると同時に日本人であることを超え、韓国人の卒業生であれば、韓国人であると同時に韓国人であることを超えるという複眼的な視点が、今日求められています。

今日、複合的な視点をもつために欠かすことができないのが、リージョナリズムの視点です。グローバル化は世界を一つにしていって行くものであることは間違いありませんが、それと同時に、グローバル化が進む中で、リージョン、すなわち地域ということが改めて注目されるようになってきました。北アメリカではアメリカ合衆国を中心にある種のまとまりとしての地域が成立しつつありますし、ヨーロッパではEUを中心に、やはりある

平成18年度卒業式が、3月23日（金）に、大講堂（安田講堂）において挙行された。

式は、第一部（9時開式）理系学部、第二部（11時開式）文系・教養学部の2回に分けて行われ、約2,930名の卒業生（卒業生数3,264名）が出席した。

開式に先立ち、総長をはじめ、理事・副学長、各学部の学部長及び代表教員、並びにご来賓（経営協議会学外委員、学友会役員、各学部の同窓会等代表者）の方々がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となった。

はじめに、音楽部管弦楽団による「ヘンデル作曲『王宮の花火の音楽』より『序曲』」が演奏され、壇上列席者の紹介があった後、第一部は岡村理事・副学長から、第二部は佐藤理事・副学長から学事報告が行われ、小宮山総長から、各学部卒業生代表に、順次、学位記が授与された。

続いて、小宮山総長から卒業生に告辞が述べられた後、音楽部コーラルアカデミーによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の斉唱をもって式を終了した。

なお、卒業生の父母会場（法文2号館31番教室、3番大教室及び1番大教室）には、モニターを設置のうえ大講堂での式典の様相を放映し、父母など約3,370名が出席した。また、2回の式ともインターネットによるライブ中継を行った。

## 平成18年度東京大学卒業式総長告辞



東京大学総長  
小宮山 宏

本日、東京大学を卒業する皆さんに、東京大学の教職員を代表して心よりお祝いを申し上げます。本年度、東京大学卒業生は総勢3,264名です。このうち女性の卒業生は662名、学士入学による卒業生が28名、留学生の卒業生も48名となっています。

東京大学が女子学生を学部初めて受け入れたのは、まだ東京帝国大学を名乗っていた敗戦直後の1946年のことですが、このとき実施された入学試験の合格者1,026名のうち、女性はわずか19名でした。その後、半世紀を越える歳月が経過して、女性の卒業生は、このところ毎年600人を超えるまでになりました。またグローバル化が進む中で、本学の国際化も進み、大学院ほどではありませんが、学部留学生の数も着実に増え続けています。さらに本日の卒業生の中には、いったん社会に出て活躍された後、学士入学をして再び大学に戻ってきた方も含まれております。卒業生中、最高年齢の方は80歳です。

20世紀後半の社会変動の中で、大学もその影響を受け、東京大学も大きく変貌しました。卒業生の性別・年齢・国籍の多様化は、大学の変化を象徴しております。変化の激しい時代を生き抜くためには、多様であることが求められますが、このような多様化をあらゆる領域で進めていくことが、本学の活力の源泉になると、私は確信しています。

東京大学は、1877年に、東京開成学校と東京医学校が一緒になって発足しました。それから3つの世紀にまたがって、東京大学は、日本の近代の歴史とともに歩んでまいりました。本年は、ちょうど創立130周年にあたっています。私たちはみな日々の生活に忙しく、現在のことにも目を奪われがちで、あまり歴史について考えることがありません。しかし、時に立ち止まって、自分がいま長い歴史の中でどのような位置に立っているのか、振り返ってみることも重要です。そうすることによってはじめて、これから未来に向かってどのように進んでいくのかということについて見通しを得ることができるのです。特に



種のまとまりとしての地域の存在が意識されるようになっていきます。東京大学が存在する日本という国で考えれば、やはり東アジアというのが、ここでいうグローバル化する時代におけるリージョンであります。

日本は東アジアの一角に位置するということから逃れることはできないのですが、大陸から海で隔てられていたこともあり、これまで、この点に関する自覚が弱かったと思います。それだけでなく、現在はいくらか改善されましたが、数年前には、近隣諸国の人びとから日本に対する敵対感情が噴き出したことがありました。これは相互にとって不幸なことです。こうしたことを再び起こさないために、狭隘なナショナリズムに陥るべきではありません。

幸い東京大学に関して言えば、東アジアに焦点を当てた未来志向の動きが出てきています。東京大学は、2000年から、北京大学、ソウル大学、ベトナム国家大学ハノイ校と一緒に、東アジア四大学フォーラムを毎年開催してきました。これは東アジアという地域のアイデンティティを、大学というレベルで確立するための試みです。また、学生の方でも、昨年10月に、第1回の「京論壇」が開催されました。「京論壇」というのは、東京大学と北京大学の学生の間で、共同研究の発表と対話のために開かれた集会です。両大学の学生たちが、安全保障・歴史・経済・環境について英語で率直な意見交換をし、相互認識が深まったと聞いております。このような取り組みの積み重ねは、東アジアにおける一層の協調と相互発展につながっていくでしょう。安田講堂での卒業式が復活した最初の卒業式において、当時の有馬総長は、「日本はもっとアジアの近隣諸国との交流を大切にすべきである」と述べましたが、この言葉の持つ意味が今日ますます重くなっているように思われます。

告辞の冒頭で申したように、今から64年前の11月、学徒出陣する皆さんの先輩は、壮行会の後この安田講堂を出て戦地に赴き、中には戦死して二度とキャンパスの土を踏めなくなった方もおりました。本日卒業式を終えて安田講堂を出られる皆さんの前途に、平和で明るい未来が待っていることを、私は心から祈ります。そして、皆さん自身が、自律分散協調系としての社会の担い手となり、グローバル化の中で複合的な視点を身につけて、平和で明るい未来を作る先頭に立ってくださることを、私は強く希望します。

皆さんの前途に幸あれと祈りつつ、卒業式の告辞を終わることにいたします。

(平成十九(2007)年三月二十三日)



平成18年度学位記授与式が、3月22日（木）に、大講堂（安田講堂）において挙行された。

式は、第一部（9時開式）人文社会系研究科、教育学研究科、法学政治学研究科、経済学研究科、総合文化研究科、新領域創成科学研究科、学際情報学府、公共政策学教育部、第二部（11時開式）理学系研究科、工学系研究科、農学生命科学研究科、医学系研究科、薬学系研究科、数理科学研究科、情報理工学系研究科の2回に分けて行われた。式には、約2,750名の修了生（修了者数4,398名（修士課程2,865名、博士課程1,153名、専門職学位課程380名））が出席した。開式に先立ち、総長をはじめ、理事・副学長、各研究科長及び各研究所長がアカデミック・ガウンを着用のうえ登壇し、開式となった。

はじめに、音楽部管弦楽団による「ヘンデル作曲『王宮の花火の音楽』より『序曲』」が演奏され、壇上列席者の紹介があった後、第一部は古田理事・副学長から、第二部は西尾理事・副学長から学事報告が行われ、小宮山総長から各研究科・課程の修了生代表に、順次、学位記が授与された。続いて、小宮山総長から修了生に告辞が述べられた後、音楽部コーラルアカデミーによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の斉唱をもって式を終了した。

なお、修了生の父母会場（法文2号館31番教室、3番大教室及び1番大教室）には、モニターを設置のうえ大講堂での式典の様相を放映し、父母など約2,700名が出席した。

## 平成18年度学位記授与式総長告辞

東京大学総長  
小宮山 宏

本日、博士、修士、専門職の学位を授与された皆さんに、東京大学の教職員を代表して心からお祝いを申し上げます。また、皆さんを支えて下さった多くの方たち、特に、皆さんのご両親に、また結婚しておられる方にはその配偶者の方にも、心からお祝いを申し上げます。

私は、今からちょうど40年前の1967年に東京大学工学部化学工学科を卒業し、大学院に進学しました。この40年の間に東京大学は様々に変化しましたが、とりわけ大学院は大きく変貌しました。学生数からみましても、当時学部学生の総数12,227人に対して、大学院生は、修士、博士あわせて、3,705人に過ぎなかったのです。それが現在13,600人、学部学生は14,471人ですから、ほぼ学部匹敵するまでになりました。

とりわけ印象的なのは、大学院生の進路の多様化です。40年前、大学院は研究者の養成、特に大学の研究者の養成がその主たる目的と考えられておりました。それに対して、今日では、大学院修了者の活動の場は、大学や研究機関にとどまらず、多くの企業や官庁や国際機関などに広がり、その職務内容もきわめて多岐にわたるようになっています。私は、こうした大学院修了者の進路の多様化を、本質的に望ましいことと考えています。皆さんも4月以降、多様な場において多様な活動を開始されます。そうした多様性が素晴らしいということをお前提として、私は皆さんに、是非ひとつの共通課題を果たしていただきたいと願っています。その願いとは、知のフロントランナーとして走り続けて頂きたいということです。

私の言う知のフロントランナーとは、人類の知の最先端に立ち、自らの叡智を振り絞って未知なるものに挑戦し、困難な課題を解決して、私たちが住むこの世界を私たちが子孫にとって少しでも良いものにしようとする人々を指します。かつては大学教員が知のフロントランナーの有資格者であると考えられていましたが、大学院修了者の進路の多様化と並行して、知のフロントランナーのあり方も劇的に多様化しました。大学に所属しようと企業に所属しようと、研究者であろうと実務家であろうと、文系であろうと理系であろうと、それぞれの活動の場において、勇気と能力と責任感をもって、知の最先端に立ち、未知なるものに挑戦し、困難な課題を解決しようとする人はすべて、知のフロントランナーの有資格者です。皆さんは、知のフロントランナーとなるために必要な能力を、確実にお持ちです。あとは、先頭に立つ勇気と責任感を身につけて、それぞれの活動の場で知のフロントランナーを目指してください。私がこれからお話することは、知のフロントランナーを目指すうえで必要と思われる三つの勧めです。

三つの勧めの第一は「鈍の勧め」です。

「鈍」とは鈍感の「鈍」です。しばしば「運・鈍・根」と3つ続けて、「事を成し遂げるのに必要な3条件」の意味で使われます。この場合、「鈍」は愚直を、「運」は幸運を、「根」は根気を指します。私は「運・鈍・根」のうち、「運」を重視しません。幸運が時に重要な役割を果たすことは否定しませんが、科学者は幸運を当てにしていけないからです。私は、「根」も重視しません。根気が成功に欠かせないことは事実ですが、根気をあまり強調すると、無意味な精神主義に陥ってしまうからです。「運・鈍・根」のうちで私が重視するのは「鈍」、つまり愚直です。愚直とは、愚かなほどに正直なことです。より

正確に言えば、周囲から愚かに見られるほど、自分の信念に忠実に行動することを指します。優れた能力を持つ人が、周囲の目には愚かに映るといのは、彼、あるいは彼女が、他人の評価や社会の流行を安易に受け入れることをせず、あくまで自らの信念に則って行動するからです。外部からの信号に同調するのではなく、自らの内部にあるジャイロスコープに従って行動する人間が、私のイメージする愚直な人です。

彼、あるいは彼女は、付和雷同しません。しかし同時に、頑なでもありません。彼、あるいは彼女の信念は、確実な根拠に基づいて考え抜かれたものであり、それゆえに単なる流行に付和雷同することはありません。しかし、自分よりも優れた見解に出会ったときは、それまでの見解を深く変更する決断力を持っています。実は、こうした愚直な人間像こそ、私が長年理想としてきた研究者の在り方なのです。

研究者は登山家に似ています。誰も解いたことのない課題に挑戦し解答を見出すのが研究者の使命ですが、登山家も、誰も登ったことのない山に初登頂し、誰も歩いたことのないルートを一初制覇することに、生き甲斐を感じるからです。そして、単に生き甲斐を感じるだけでなく、他の人々に先んじて業績をあげることによって社会から評価を受けるという点でも、研究者と登山家は似ています。

愚直な研究者を登山家に例えれば、彼が目指すのは、彼が登るに値すると確信する山です。周囲に他の登山家の姿はほとんど見かけません。余りに険しい山で、頂上がどこにあるかすら定かではなく、これまでに多くの登山家が挑戦してことごとく退けられ、膨大な時間とエネルギーをかけても登山に失敗する可能性が高いと、他の登山家たちは知っているからです。愚直な登山家も、もちろんそのことは知っています。しかし、この山は登る価値があると確信するがゆえに、ひたすら頂上を目指します。既存の常識に捉われず、思い込みを排して、ありとあらゆるルートを試み、時には迂回することも躊躇せず、一步一步着実に頂上を目指します。その試みが成功するとは限りません。しかし、成功したとき、それは世界的業績と称えられることになるのです。

愚直さは、研究者としてもっとも重要な要素であると私は確信していますが、研究者が愚直であり続けることは、次第に難しくなりつつあります。それは、短期間のうちに、目に見える形での成果を求める傾向が、強まりつつあるからです。企業など利潤を上げることを目的とする組織では、成功の見通しの乏しい研究を長期にわたって続けることは困難です。大学は利潤を目的とした組織ではありませんが、研究費の多くが競争的資金によって賄われており、競争的資金を継続的に獲得し続けるためには、研究者は絶えず研究成果を挙げ続けなければなりません。こうした環境では、成功の確率の低い大きな問題よりも、

成功の確率の高い小さな問題を選ぶ傾向が支配的になってしまいうのです。

再び登山に例えれば、研究者が成功の確率の高い小さな問題を追い続けるということは、登山家が登りやすい山を選んで登山するようなものです。多くの業績を積み重ねても、人類の知の境界を大きく拡張するような成果は生まれません。既成の知識体系をブレイクスルーするような新たな発見は、愚直な研究から生まれる可能性が高いのです。愚直な研究者であり続けることは、困難なことです。そのことを前提としたうえで、それでも私は皆さんに、心のどこかに、愚直な研究者を理想とする意識を持ちつづけて頂きたいと思っています。

三つの勧めの二つ目は、「俯瞰の勧め」です。俯瞰とは、高い場所から見下ろすことです。このことについては、やや立ち入った説明が必要でしょう。

三たび登山の例を使うと、私は時にはヘリコプターで山頂に到達することも必要だと思っています。今申しましたように、私は一步一步着実に頂上を目指す愚直な登山家を高く評価します。しかし、私たちの持つ資源は、時間にしても能力にしても限りがあり、常に愚直な登山をする余裕はありません。限られた資源を有効に使って、多くの仕事をなすためには、自分をもっとも大切だと確信する対象に対して愚直に挑む一方で、時にはヘリコプターを使って一気に頂上に降り立つことも必要なのです。

この両面を使い分ける能力は、膨大な情報の海の中で仕事をする現代の研究者に不可欠な自己管理能力なのです。問題は、何のためにヘリコプター登山が必要なのかということです。それは、高い位置から山々の全体像を俯瞰し、自分の立っている位置や目指すべき方向を確認するためです。研究者の場合であれば、学問全体の中で自分が行っている研究の位置や意味を捉え直すためです。

この捉え直しの作業は、研究者が専門化の罫から自らを解放するために不可欠な作業だと私は考えています。理系と文系とを問わず、ほぼ全ての学問領域で、研究の専門化が急激な勢いで進行しつつあります。このことは、すでに大学院で学ばれた皆さんが良くご承知のとおりです。知の最先端に挑み、知の境界領域を少しでも拡大しようというとき、研究者が極めて限定された領域に時間とエネルギーを集中的に投入するのは当然の研究戦略であって、研究の専門化はもはや不可逆的な傾向です。しかし、考えてみてください。知は本来、さまざまな要素が密接に関係しあう構造的なものです。知の構造的な性格を無視して、いわば一点突破の形で研究を進めた場合、袋小路にはまり、行き詰る可能性が高いと、多くの若い研究者を見守った経験から、私は断言します。そして、袋小路から抜け出す最善の方法は、ヘリコプター登山をして、頂上の高みから、それまで自分

の立っていた場所と、進もうとしていた方向を眺め、全てを相対化してみることで、同じ経験を踏まえて、私は断言いたします。

私は、総長に就任以後、教養学部で学術俯瞰講義を行ってきました。講義担当の先生は、ノーベル賞受賞者の小柴名誉教授をはじめ、それぞれの分野で赫々たる研究業績を挙げてこられた方です。こうした大学者はいずれも、愚直な登山とヘリコプター登山の両方を実践されてこられた方です。そうした大先生にお願いして、その学問分野の全体像の中にご自身の研究を位置づけていただく試みが、学術俯瞰講義なのです。学術俯瞰講義はあくまで、高度な専門研究を行うそれぞれの研究者から見た学問分野の全体像であり、それぞれの研究者を離れては成立しません。その意味で、学術俯瞰講義は概説講義とは似て非なるものです。

私が申し上げた「俯瞰の勧め」とは、皆さんに皆さん自身の学術俯瞰講義を行っていただきたいということです。東京大学の学術俯瞰講義と違って、この講義の聴衆は皆さん自身ですから、これは完全に皆さん自身のための講義です。講義の時期はいつでもよいのですが、大学院を修了して10年目、20年目、30年目と、およそ10年おきくらいが適当でしょう。というのも、私の経験では、10年に一度位の割合で大きな壁にぶつかるからです。

知の最先端を目指して愚直な努力を繰り返して壁にぶつかったとき、どうか皆さん自身の学術俯瞰講義を試みてください。ヘリコプターに乗って高い山の頂に降り立ち、広く周囲を眺めわたし、自分がそれまで立っていた位置と目指していた方向が適切なものであったかどうかを、確認してください。知の巨大な構造の中で、皆さんの研究が持つ意味を改めて考えてみてください。その自己相対化と再検討の作業は、必ずや皆さんに勇気と新たな飛躍のためのヒントを与えてくれるはずです。

皆さんが知のフロントランナーを目指すうえで必要と思われる三つの勧めの最後は、「教えの勧め」です。皆さんは本日大学院を修了しますが、さまざまな分野で知の革新が加速度的に展開されている現在、皆さんが大学院で身につけた知識はあっという間に古びてしまいます。皆さんの学びの過程は本日で終わるのではなく、一生続くことになります。このことは皆さん良くご存知ですから、改めて申しません。私が申し上げたいのは、皆さんが自ら学び続けるだけでなく、教え続けていただきたいということです。

大学はいうまでもなく教育を主要な任務とする組織ですが、大学だけが教育組織というわけではありません。教育組織の目的は人材の育成にあります。人材の育成を行うという点に着目

すれば、企業もまた教育組織の役割を果たしています。学生時代に知らなかった人間が、企業に就職して数年後に見違えるように配慮の行き届いた人間に変容した事例を何度も経験しました。あるいは企業の方が大学より教育力は上なのかもしれません。その企業の教育力が、最近低下しているように感じられます。目先の収益を上げることを重視して、人材養成という手間と時間のかかる任務を放棄し、大学に即戦力となる人材の育成を求め、あるいは他企業から即戦力を引き抜くという傾向が、見受けられるようになってきました。私はこれを由々しき問題だと感じています。資源の乏しい日本が繁栄を持続する鍵は、優れた人材の育成にあります。さまざまな組織の教育力を高めることが日本の未来を保証すると、私は確信しています。

皆さんは、単に皆さん自身が知のフロントランナーとして未知なるものに挑戦し困難な課題を解決するだけでなく、その活動を通じて、多くの人材を育ててください。

私は過去30年余り、大学という場で研究と教育を行ってきました。研究と教育は別々のものではありません。研究することで教育に対する新たな意欲を掻き立てられ、教育することで研究に対する新たな刺激を受けてきました。個人としてはさほど能力に恵まれない私が、数十年にわたって研究の第一線に立ち続けることができた最大の原因は、人に教えることを重視してきたからだ、私は考えています。教えることは、教えられることだと申します。まったくその通りだというのが、私の偽らざる実感です。皆さんもどうかそれぞれの活動の場で人を育て、人を育てることで自分自身もさらに大きく育ててください。

本日、学位を取得して社会のさまざまな分野に進出される皆さんは、東京大学を巣立つのであって、東京大学に別れを告げるものではありません。東京大学を巣立っても、皆さんは東京大学のコミュニティの一員です。私たちの目の前には、地球温暖化や資源の枯渇、社会的格差の拡大や人口の爆発、文明の衝突や生命倫理など、人類のこれまでの知識では解決できない問題群が山積しています。皆さんは、大学に所属しようと企業に所属しようと、研究者であろうと実務家であろうと、文系であろうと理系であろうと、それぞれの活動の場において、フロントランナーの勇気と能力と責任感をもって、これらの問題に挑戦してください。

皆さんの努力が報いられることを祈りつつ、私の式辞を終えることにいたします。

(平成十九(2007)年三月二十二日)



## 特集

# 平成18年度第2回 「東京大学総長賞」「総長大賞」授与式

平成18年度第2回学生表彰「東京大学総長賞」授与式が3月22日（木）17:00より小柴ホール（本郷キャンパス）にて執り行われた。学生表彰「東京大学総長賞」は、本学学生を対象として、学業、課外活動、各種社会活動、大学間の国際交流等の各分野において、「優れた評価を受けた」「優秀な成績を修めた」「本学の名誉を高めた」などの顕著な功績があった個人又は団体に総長が表彰を行うものであり、平成14年度から設けられている。

本年度より、第2回（春）は学業のみを対象として募集を行い、合計31件の推薦をいただき、学生表彰選考委員会の厳正なる審議の結果、以下の16名の受賞者が選出された。

授与式では、選考結果の報告のほか、総長から表彰状と記念品の贈呈後、各受賞者から受賞内容に関するプレゼンテーションが行われた。



受賞者全員の記念写真

## 総長大賞 受賞者紹介



総長大賞を授与される國枝明弘さん



総長大賞を授与される蔡恩美さん

また、本年度より、年間総長賞受賞者の内、特に優れた者に対して、「総長大賞」が授与されることとなり、プレゼンテーション終了後、別室にて、総長及び学生表彰選考委員による審査が行われた。その結果、第1回（秋）受賞者の國枝明弘さん（経済学部4年）及び第2回（春）蔡恩美（チェ・ウンミ）さん（工学部4年）に「総長大賞」が授与されるとともに、今回は特別に「総長特別賞」が設けられ、竹内一将さん（理学系研究科修士課程2年）に授与された。

授与式には受賞者関係者のほか、学部卒業生・大学院修士課程修了生総代も多数参加し、プレゼンテーションや授与の際には、感嘆の声が上がる場面もみられるなど、賑やかな雰囲気のまま授与式は終了した。



### 國枝 明弘 経済学部4年

國枝氏は「落語の祖」である安楽庵策伝の出生地である岐阜市とNHKが主催する第3回全日本学生落語選手権・策伝大賞大会において「井の線亭ピリ馬」（いのせんていびりば）の高座名で出場し、見事に優勝し最高賞である「策伝大賞」の栄誉に輝いた。本大会は桂三枝師匠（上

方落語協会会長）や立川志の輔師匠を審査委員とし、文化庁、（社）落語協会、（社）落語芸術協会、（社）上方落語協会、岐阜県、岐阜県教育委員会、岐阜市教育委員会の後援を受けるもので、北は北海道から南は沖縄まで全国36大学114名の学生が参加した。これにより文部科学大臣より「賞状」、岐阜市長より「岐阜市長賞」が授与された。

また、同氏は自身の話芸能力を生かし落語ボランティア活動を始め、豊島区・文京区の高齢者施設、新潟県長岡市の仮設住宅、盲学校、緩和ケア病棟などで延べ70回に渡り活動を行い、豊島区社会福祉事業団より感謝状を授与される等、現在も精力的にこの活動を続けている。



### 蔡 恩美（チェ・ウンミ） 工学部4年

蔡氏は韓国人国費留学生ながら工学部物理工学科の学科成績はトップであり、大学院修士課程入試においても留学生として史上初のトップ合格を果たしている。日本語でまとめた卒業論文「歪トラップしたCu<sub>2</sub>Oパラ励起子の励起子

Lyman分光」では、実験手法をゼロから開拓し、固体分光学の分野で40年来の懸案である、励起子ボース・アインシュタイン凝縮観測に迫る重要な成果を上げ、物理学優秀論文賞に選ばれた。性格もまじめで明るく、才能と資質に恵まれた国際的リーダーとして活躍が期待されている。アジアからの女性留学生が本学に学び、卓越した学業成果を上げたことは、世界の学術科学技術の発展にとっても極めて意義があると高い評価を受けた。

## 総長特別賞 受賞者紹介



竹内 一将  
理学系研究科修士課程2年

竹内氏は非平衡系における相転移現象の重要性を研究当初から認識し、手法に捉われない多角的なアプローチによって実験・理論の双方において業績を挙げてきた。中でも特筆すべきはDirected Percolation (DP) 転移普遍性の実在証明である。入ったら出られない状態への転移はDP転移と呼ばれ、理論の上では物理・化学・生物のあらゆる分野で普遍的な挙動が見られるが、十分な実験的証拠は存在しなかった。同氏は液晶の乱流間転移に着目し、従来謎であった履歴現象がDP転移に起因することを看破し、高精度実験によってDP普遍性がそこに実在することを示した。これは約20年間懸案であった問題に決着をつける快挙であり、重要な学術成果である。



## 総長賞 受賞者紹介



江間 有沙 教養学部4年

江間氏は卒業論文において技術の社会的受容をめぐる、ICタグ導入のプライバシーとセキュリティの対立を扱った。日本では親がICタグ導入を望んでいるのに対し、米国では人間を対象としたICタグ技術はプライバシーの観点から批判されている。本研究では国際比較のために日本の小中学校を対象に意識調査を行い、実証的データを得た。その結果、日本では保護者、児童ともプライバシー意識が希薄であること、技術の知識量と技術の受容度との間に相関はないこと、技術で得られるのは安全確保というより安心確保にすぎないこと等が示唆され、国際科学技術社会論会議での発表でも高い評価を得た。日本の安全安心研究に一石を投じるものであり、国際比較研究としても高く評価された。



杉山 杏奈 農学部4年

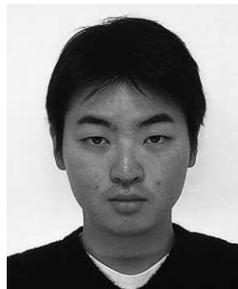
杉山氏は消失や劣化の進む熱帯林に強い関心を持ち、将来は熱帯林保全に関わりたいという明確な目標を持って森林生物科学専修に進学し、真摯な態度で勉学に取り組み、卓越した学業成績を修めた。卒業論文では樹木大型種子の貯蔵をテーマとして、地道な実験作業にも根気よく取り組み、乾燥耐性がないため貯蔵が困難とされていた樹種について超低温凍結により胚軸の生理活性を維持させる方法についての知見を得た。さらに運動会空手部に所属して4年生まで熱心に練習にはげみ試合に参加するなど、勉学だけでなく何事に対しても最後まで一生懸命に取り組む姿勢が高く評価された。



池内 桃子 理学部4年

池内氏は理学部在籍中極めて意欲的に講義を履修し、生物学科4年生として最も優の取得数が多いという抜群に優秀な成績を修めた。講義中積極的に発言・質問をすることで、クラス全体の学習意欲を高める効果をもたらした。夏期休暇には他大

学の特別コースを各種履修したが、特に、京都大学主催の屋久島野外演習に参加した成果を国際科学誌に共著論文としてまとめて発表するまでの成果を上げた点は賞賛に値する。さらに、同氏は本年度の「理学部学生選抜国際派遣プログラム」にも難関を突破して受賞した。意欲的かつ達成度が高く国際性に富む学生として高く評価された。



塩尻 康太郎 法学部4年

塩尻氏は法学部において全優の成績を修めるとともに、2004年3月、外交問題に関してアメリカを代表するシンクタンクである外交問題評議会のワシントン支部において、インターンシップに従事し、資料収集、会議出席、レポート作成を行う等、広い経験を積んだ。

また、外国で生活した経験を生かし、教養学部における留学生支援プログラムに参加する等、生活支援から学業支援にいたる幅広い活動に従事し、このプログラム終了後も留学生との接触を続けている。このほかにも、外国人に対する日本語教育や支援に、ボランティア・ベースで参加する等、その活躍と貢献は顕著である。



杉山 雄大  
医学部（平成17年度卒業生）

杉山氏は米国の12~19歳の男女約5千名を対象にした健康及び生活習慣の大規模調査（NHANES 1999-2002）に詳細な疫学的分析を加え、肥満度とは独立に、身体不活動が血圧を相対的に高めることを初めて明

らかにした。成人における同様の知見はほぼ確立しているが、この研究成果により身体不活動に対する青少年期からの予防的介入の重要性が示唆されることとなった。同氏は、医学科5年次の米国短期留学から医師国家試験準備で忙しい卒業直前まで、学業や部活動（全日本医科学生体育大会バスケットボール3位入賞）に加え、研究を続け成果を得た。この間のたゆまない努力と未解明の課題に取り組んだ好奇心と成果が高く評価された。



鈴木 雅映子 教育学部4年

鈴木氏は2005年9月から10月にかけて北京大学と東京大学の学生による学習交流ネットワーク「京論壇」を組織し、歴史・環境・安保・経済の研究グループを構成して両国を相互に訪問し、大学教員・企業・政治家等の協力を経て現地でのセミナーと調査研究

活動を行った。次世代リーダーとして期待される日中の学生による連日にわたる議論は様々なメディアに報道され、人々に深い感動を与えた。同氏は「京論壇」の発案、組織運営、資金調達に加え、セミナー・フィールドワーク・シンポジウムの企画運営の実行委員長としても精力的に活躍し、その企画力・組織力・指導性を如何なく発揮することにより日中関係に対する理解の推進に貢献したことが高く評価された。



藤間 達哉 薬学部4年

藤間氏は薬学部で開講されている全科目において「優」の成績を取得するだけでなく、大学院薬学系研究科の修士課程入学試験においても抜群の成績で合格するという卓越した学業成績を修めた。同氏は指導教員であ

る福山教授が「私の米国、日本を合わせて29年間の教員生活の中でもトップにランクする」と評する優秀さを持ちながらも、決して驕ることなく人並み以上の努力を重ねた。その類稀な意欲は勉学のみにとどまらず、所属した研究室においても着実に知性と創造性に溢れた研究を行い、学部4年生としては異例ともいえる論文二報にまとめ得る研究を成し遂げた。



Li Huiyu (リ・フイユ)  
経済学部4年

リ・フイユ氏は中国生まれのオーストラリア留学生である。トップレベルの成績であると共に、ゼミでの活動を重視する経済学部において、ゼミや合宿での議論、共同研究プロジェクト、自主研究等において国際

的な視点からの鋭い質問を投げかけるなど他学生に多大な影響を与えている。さらに大学院の上級国際貿易論の授業にも積極的に参加し、大変高度な経済学の知識を持ち、常に高いレベルのレポートを作成している。卒業論文もミクロ経済学の基礎に基づいた高度なマクロ経済モデルを用いて、日本のバブル経済成長から崩壊時期における経済の動きと今後の展望について興味深いシミュレーション分析などを行い、高い評価を受けた。



**瀬川 泰知**  
工学系研究科修士課程 2年

原子同士の結合は主に求電子種(プラス)と求核種(マイナス)とが反応することで作ることができ、水素・炭素・窒素・酸素などは求核種や求電子種それぞれの性質の化合物が存在するが、ホウ素は有機化学百年の歴史において求電子種

として用いるしかなかった。瀬川氏はこれまで観測すらされなかったマイナス電荷を持つホウ素求核種の合成研究に着手し、世界で初めてのマイナス電荷を持つホウ素求核種であるポリルチウムという革命的な化合物の合成に成功した。有機ホウ素化合物は医薬品、農薬、有機材料等を合成する上で重要性が増しており、同氏の研究成果は各国の化学学会誌にて世界的な注目を集めている。



**岡野原 大輔**  
情報理工学系研究科修士課程 2年

岡野原氏はコンピュータサイエンスの理論、工学の両面からの研究に取り組み、自然言語処理、機械学習、アルゴリズム工学など幅広い分野において、国内外での学会発表・論文などで研究成果を収め、他分野の研究者との共同研究を積極的に行うな

ど、従来の研究境界を越えた研究活動を行ってきた。また、同氏は未踏ソフトウェア創造事業でスーパークリエイターに認定されるなど、技術の実用化にも注力する一方、解説記事の執筆などによる技術の普及活動に努めており、産業・社会に幅広く貢献してきた点が高く評価された。



**佐々木 拓哉**  
薬学系研究科修士課程 2年

佐々木氏は、従来の脳研究が抱えていた適切な実験技術の欠如という問題点を打破し、数百個の神経細胞の活動を一齐に可視化できる「多ニューロンCa<sup>2+</sup>画像法」を確立した。この常識を覆す画期的技術は分野内外から高く評価され、

第4回東京大学学生発明コンテストで優秀賞、学会発表で最優秀賞を受賞した。また、神経回路の特性に関する新たな知見を多数見出し、実験と理論をつなぐ次世代の研究者として、国際専門誌Journal of Neuroscienceをはじめとする計4報の英文学術論文、筆頭著者として計8回の国内外における学会発表を行った。本画像化技術は、システム病理学や薬理学にも応用できるため、未解明の病因の解明・治療法の確立にも貢献できると期待される。



**高峰 愛子**  
総合文化研究科博士課程 3年

高峰氏は高エネルギーで生成される不安定原子核を高周波イオンガイド法を用いて効率よく減速・冷却し、イオントラップ中に捕獲して絶対零度付近まで冷却する装置を開発した。これを用いて不安定ベリリウム同位体のエネルギー

を13桁冷却し、その高精度レーザー分光に世界で初めて成功した。この装置はあらゆる元素の低エネルギー不安定核を生成し、精密原子分光を使って不安定核の性質や構造を系統的に研究する道を拓くのみならず、物性科学や生命科学への応用も期待される。この装置開発が高く評価され、第一回口リアル・ユネスコ女性科学者 日本奨励賞を受賞した。これは若手女性研究者の大きな指標になると考えられるものである。



**渡辺 佑基**  
農学生命科学研究科  
博士課程 3年

渡辺氏は最先端のバイオリギングシステムを用いて、ロシアのバイカル湖に生息しているバイカルアザラシの潜水行動を調査し、アザラシが独特の浮力調節をしていることを明らかにした。この研究は、J. Exp. Biol.誌上においてイラスト

入りで特集されるなど、国際的にも高く評価されている。同氏が開発した切り離し装置はアザラシだけではなく魚類や海亀類などへも応用されている。また、同氏は南極海・北極海のアザラシや長江のチョウザメを対象に実施した国際共同調査にも参加し、優れた成果をあげてきた。厳しい自然環境下での彼の活躍は目を見張るものがあり、その研究成果はフィールドサイエンスの新しい境地を開拓したものとして高く評価された。



**岡 勇輝**  
新領域創成科学研究科  
博士課程 3年

岡氏は嗅覚研究において嗅覚受容体での混合臭の受容メカニズムを解明すると共に、嗅覚中枢での匂い応答を分子レベルで解析する手法を開発した。これらは、鼻腔内の嗅覚受容体からの匂い情報が高次神経へ

伝達される過程を解明する糸口を与える成果であり、日本の高い研究水準を世界に示すことに大きく貢献した。これらの成果は、いくつものトップレベルの英文学術雑誌への掲載や国際会議での講演により、国内外で極めて高い評価を得た。一方、各種新聞やメディアにも大きく取り上げられ、ともすれば一般社会との接点が希薄な基礎研究に対して、世間の関心を広く集めたことも特筆に値する。また同氏は、修士、博士両課程において専攻、及び研究科の最優秀論文賞を受賞しており、同氏の研究姿勢、及び成果は本学学生の範となるものとして高く評価された。

創立130周年記念事業の一環として、「知のプロムナード」構想があります。これは、「東京大学アクション・プラン2006 VI-4-2（研究成果を活用した知的プロムナードの整備）」に掲げられているもので、創立130周年を記念して「本郷」、「駒場」、「柏」、「白金台」の各地区キャンパスに、学生や教職員がくつろげる語らいの空間を130（この数字は象徴的意味）設け、誇るべき歴史や研究成果を活用したストーリー性をもつ「知のプロムナード」とする構想です。

学内広報No. 1350でもお知らせしましたが、このたび「知のプロムナード デザインコンペ」を以下のコンセプトのもと実施することになりました。



## 1. コンセプト

本学は今年、創立130周年を迎える。これを記念して現在、各地区キャンパスで大学の知的営為の蓄積を感じさせる場所を選びだし、人々が憩い、語らい、楽しめる、あるいはひとり静かに思索できる場を整えてゆく「知のプロムナード」構想を進めている。構想では、キャンパスの中で人が留まり、その場所を楽しめるきっかけとなるようなくベンチ>を各所に設置する予定であり、広く大学の構成員にそのデザイン案を募ることになった。

アイデアの力によって、ただ腰をおろすだけのくベンチ>も、キャンパスのそれぞれの場所や環境に現れる歴史や意味を感じてもらう一種の「しかけ」となる。そしてこれを継続的に維持すること自体が、大学における知的、感性的な制作活動の一端を示すようなく表現>にもなる。くベンチ>でありながらくベンチ>の役割を無限に広げてゆくようなデザインを考えてほしい。

## 2. デザインの条件

- ★ 設置される場所は本郷、駒場、柏、白金台の各地区キャンパスとし、基本的には屋外。別図（ホームページ参照）に指定する候補地から応募者の判断で選択する。そこに置くくベンチ>の設置方法を提案する。設置場所は、周辺環境、交通の状況などを考慮すること。
- ★ 最低限備えるべき機能は、一ヶ所に複数の人が座れること、周辺環境にある器物、銅像、植栽、景観などに関する説明用パネルを設置できること。その他、応募者が必要と判断する機能を盛り込んでもよい。ただし全体として「ベンチ」であると一般的に判断できるようなものでなければならない。
- ★ 説明用パネルの大きさ、材質などのデザインは応募者が設置場所の特徴に応じて判断する。説明文はパネルに近づいて読まれると想定しているので、必要以上に大きいものでなくてよい。説明の文案は実施設計の段階で調整するので考える必要はない。
- ★ 照明、植栽、舗装など周辺の整備を行うことを想定して良い。
- ★ ベンチの材質、大きさは自由に工夫して良い。ただし設置場所の状況などを考え、大きさは常識的な範囲内とする。
- ★ 形状、仕様、構造などは長期にわたって安全に使用できるものとする。

## 3. 応募作品の提出先

- ★ 応募締切 2007年5月11日（金）必着
- ★ 応募提出先  
東京大学施設部環境課「知のプロムナード小委員会」宛てに、  
郵送で提出する。（持ち込み提出、宅配便などは不可）  
〒113-8654 文京区本郷7-3-1  
東京大学施設部環境課  
「知のプロムナード小委員会」



あなたのアイデアを、東京大学の歴史に刻むチャンスです！  
多数のご応募お待ちしております！

#### 4. 応募の条件、提出物

- ★ 本学の教職員、学生、卒業（修了）生
- ★ 提出物は、A-3版の紙1枚に、設置場所や設置方法、ベンチ等の具体的な形、材質などがわかる絵、図などを書き入れる。彩色など表現方法は自由。すべて文章で表現することは不可。他に必ず200字以内のデザインの趣旨文を入れる。  
※パネル、ボード類としてはならない。  
※紙の裏面中央に氏名、住所、所属、連絡先を明記すること。  
※卒業（修了）生は、卒業した学部（研究科）名と卒業（修了）年も明記すること。
- ★ 各地区キャンパスの候補地となっている地図および候補地リストは、以下のホームページをご参照ください。  
**URL: <http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/130prome.html>**
- ★ 応募案の著作権は応募者に属するが、教育研究、広報活動など東京大学が必要と判断した場合は図面、パース、写真その他趣旨文などの紹介、引用などができるものとする。また入選作の製作、設置にあたって、大学が必要と判断した場合、応募者と協議の上、設置場所、形状、仕様などに変更を加えることができるものとする。

#### 5. 審査、賞

「知のプロムナード小委員会」によって入選作10点前後を選び、キャンパス計画室で決定する。入選作は原則として製作し、キャンパス内に設置される。  
入選作の応募者には賞状と副賞

《各地区キャンパスの候補地イメージ》



↑ 医学部前（本郷）



↑ 銀杏並木（駒場Ⅰ）



↑ 時計台前付近（駒場Ⅱ）



↑ 柏キャンパス広場（柏）



↑ 近代医科学記念館（白金）

問い合わせ先  
総務部広報課 内線22031 E-mail: 130prome@adm.u-tokyo.ac.jp

# NEWS

## 一般ニュース

### 部局長の交代

一般

平成19年4月1日付で、下記のとおり部局長の交代がありました。新部局長をご紹介しますとともに、退任された部局長のご挨拶を掲載します。

	新部局長	前部局長
大学院法学政治学研究科・法学部	井上 正仁	高橋 宏志
大学院医学系研究科・医学部	清水 孝雄	廣川 信隆
医学部附属病院	武谷 雄二	永井 良三
大学院薬学系研究科薬学部	柴崎 正勝	(再任)
大学院数理科学研究科	桂 利行	(再任)
大学院人文社会系研究科・文学部	立花 政夫	高橋 和久
大学院理学系研究科・理学部	山本 正幸	岩澤 康裕
大学院農学生命科学研究科・農学部	生源寺 眞一	會田 勝美
大学院新領域創成科学研究科	雨宮 慶幸	磯部 雅彦
大学院情報理工学系研究科	下山 勲	武市 正人
医科学研究所	清木 元治	山本 雅
地震研究所	大久保 修平	(再任)
社会科学研究所	小森田 秋夫	(再任)
史料編纂所	横山 伊徳	保立 道久
分子細胞生物学的研究所	宮島 篤	(再任)
海洋研究所	西田 睦	寺崎 誠
先端科学技術研究センター	宮野 健次郎	橋本 和仁
附属図書館	西郷 和彦	(再任)

## 新部局長紹介

### 大学院法学政治学研究科・法学部

#### 井上 正仁 教授

(任期：平成19年4月1日～平成22年3月31日)



1971年6月 法学部卒業  
 1975年1月 助教授(法学部)  
 1986年2月 教授(法学部)  
 1991年4月 教授(大学院法学政治学研究科)  
 所属：刑事法  
 専門分野：刑事訴訟法

研究内容(代表的な著書や論文等)：

『刑事訴訟における証拠排除』(弘文堂, 1985年)

『捜査手段としての通信・会話の傍受』

(有斐閣, 1997年)

『司法制度改革』(共著, 有斐閣, 2002年)

『ケースブック刑事訴訟法(第2版)』

(共著, 有斐閣, 2006年)

『強制捜査と任意捜査』(有斐閣, 2006年)

### 大学院医学系研究科・医学部

#### 清水 孝雄 教授

(任期：平成19年4月1日～平成21年3月31日)



昭和48年3月 医学部卒業  
 平成3年4月 教授  
 所属：分子細胞生物学専攻生化学・分子生物学講座細胞情報学分野  
 専門分野：シグナル伝達、脂質メダイエーター、脂質代謝、病態生化学

研究内容(代表的な著書や論文等)：

1. Kihara, Y., Ishii, S., Kita, Y., Toda, A., Shimada, A., and Shimizu, T. (2005) Dual phase regulation of experimental allergic encephalomyelitis by platelet-activating factor. J. Exp. Med. 202, 853-863

2. Nagase, T., Uozumi, N., Ishii, S., Kita, Y., Yamamoto, H., Ohga, E., Ouchi, Y. and Shimizu, T. (2002) A pivotal role of cytosolic phospholipase A2 in bleomycin-induced pulmonary fibrosis. Nature Med. 8, 480-484

3. Nagase, T., Uozumi, N., Ishii, S., Kume, K., Izumi, T., Ouchi, Y., and Shimizu, T. (2000) Acute lung injury by sepsis and acid aspiration: a key role for cytosolic phospholipase A2. Nat. Immunol. 1, 42-46

4. Yokomizo, T., Izumi, T., Chang, K., Takuwa, Y., and Shimizu, T. (1997) A G-protein-coupled receptor for leukotriene B4 that mediates chemotaxis. Nature 387, 620-624

5. Uozumi, N., Kume, K., Nagase, T., Nakatani, N., Ishii, S., Tashiro, F., Komagata, Y., Maki, K., Ikuta, K., Ouchi, Y., Miyazaki, J., and Shimizu, T. (1997) Role of cytosolic phospholipase A2 in allergic response and parturition. *Nature* 390, 618-622

## 医学部附属病院

### 武谷 雄二 教授

(任期：平成19年4月1日～平成21年3月31日)

昭和48年 医学部医学科卒業

平成4年 教授 (医学部)

所属：産科婦人科学教室

専門分野：生殖内分泌学

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

Takemura Y, Osuga Y, Yamauchi T, Kobayashi M, Harada M, Hirata T, Morimoto C, Hirota Y, Yoshino O, Koga K, Yano T, Kadowaki T, Taketani Y.

Expression of adiponectin receptors and its possible implication in the human endometrium.

*Endocrinology*. 2006 Jul;147(7):3203-10. Epub 2006 Apr 6.

Hirota Y, Osuga Y, Koga K, Yoshino O, Hirata T, Morimoto C, Harada M, Takemura Y, Nose E, Yano T, Tsutsumi O, Taketani Y.

The expression and possible roles of chemokine CXCL11 and its receptor CXCR3 in the human endometrium.

*J Immunol*. 2006 Dec 15;177(12):8813-21.

EBMを考えた産婦人科ガイドラインUpdate

編集 武谷雄二

編集協力 堤治・上妻志郎

メジカルビュー社 2002年7月1日

改訂版 プリンシプル産科婦人科学

監修 坂元正一、水野正彦、武谷雄二

メジカルビュー社 2001年3月10日

NEW産婦人科学 改訂第2版

編集 矢嶋聰、中野仁雄、武谷雄二

株式会社 南江堂 2004年7月15日

## 大学院人文社会系研究科・文学部

### 立花 政夫 教授

(任期：平成19年4月1日～平成21年3月31日)



1972年3月 文学部卒業

1974年3月 大学院人文科学研究科  
修士課程修了

1979年3月

慶応義塾大学大学院医学研究科  
博士課程修了

1994年1月 教授 (文学部)

所属：基礎文化研究専攻・心理学  
コース・心理学専門分野

専門分野：実験心理学、視覚神経科学

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

Hasegawa, J., Obara, T., Tanaka, K., Tachibana, M. (2006) High density presynaptic transporters are required for glutamate removal from the first visual synapse. *Neuron*, 50:63-74.

Ishikane, H., Gangi, M., Honda, S., Tachibana, M. (2005) Synchronized retinal oscillations encode essential information for escape behavior in frogs. *Nature Neuroscience*, 8: 1087-1095.

Arai, I., Yamada, Y., Asaka, T., and Tachibana, M. (2004) Light-evoked oscillatory discharges in retinal ganglion cells are generated by rhythmic synaptic inputs. *Journal of Neurophysiology*, 92: 715-725.

立花政夫, 石金浩史 (2004) 「網膜における同期的・周期的スパイク発火の生成と機能」 蛋白質核酸酵素, 49(3), 478-485.

『心理学辞典』 中島義明、安藤清志、子安増生、坂野雄二、繁栞算男、立花政夫、箱田祐司編、有斐閣、1999.

## 大学院理学系研究科・理学部

### 山本 正幸 教授

(任期：平成19年4月1日～平成21年3月31日)



1970年3月 理学部卒業

1975年3月 大学院理学系研究科  
博士課程修了

1989年6月 教授 (理学部)

所属：生物化学専攻

専門分野：分子遺伝学

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

Harigaya, Y., Tanaka, H., Yamanaka, S., Tanaka, K., Watanabe, Y., Tsutsumi, C., Chikashige, Y., Hiraoka, Y., Yamashita, A., and Yamamoto, M.: Selective elimination of messenger RNA prevents an incidence of untimely meiosis. *Nature* 442, 45-50 (2006).

Izawa, D., Goto, M., Yamashita, A., Yamano, H., and

Yamamoto, M.: Fission yeast Mes1p ensures the onset of meiosis II by blocking degradation of cyclin Cdc13p. *Nature* 434, 529-533 (2005).

Watanabe, Y., Yokobayashi, S., Yamamoto, M., and Nurse, P.: Pre-meiotic S phase is linked to reductional chromosome segregation and recombination. *Nature* 409, 359-363 (2001).

Yamashita, A., Watanabe, Y., Nukina N., and Yamamoto, M.: RNA-assisted nuclear transport of the meiotic regulator Mei2p in fission yeast. *Cell* 95, 115-123 (1998).

Watanabe, Y., Shinozaki-Yabana, S., Chikashige, Y., Hiraoka, Y., and Yamamoto, M. Phosphorylation of RNA-binding protein controls cell cycle switch from mitotic to meiotic in fission yeast. *Nature* 386, 187-190 (1997).

### 大学院農学生命科学研究科・農学部

#### 生源寺 眞一 教授

(任期：平成19年4月1日～平成21年3月31日)



昭和51年3月 農学部卒業

平成8年6月 教授

(大学院農学生命科学研究科)

所属：農業・資源経済学専攻

開発政策・経済学講座

食料・資源経済学研究室

専門分野：農業経済学 フードシ

ステム論 農業政策論

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

『農地の経済分析』農林統計協会

『農業経済学』東京大学出版会 (共著)

『現代農業政策の経済分析』東京大学出版会

『よくわかる食と農のはなし』家の光協会

『現代日本の農政改革』東京大学出版会

### 大学院新領域創成科学研究科

#### 雨宮 慶幸 教授

(任期：平成19年4月1日～21年3月31日)



昭和49年3月 工学部卒業

昭和54年3月

大学院工学系研究科

博士課程修了 (工学博士)

平成10年4月

教授 (大学院工学系研究科)

所属：基盤科学研究系物質系専攻

物性・光科学講座

専門分野：X線計測学、回折物理

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

1) Y. Amemiya et al., "Laser-Stimulated

Luminescence Used to Measure X-ray Diffraction of

a Contracting Striated Muscle", *Science*, 237, 164 (1987).

2) Y. Amemiya and J. Miyahara, "Imaging Plate Illuminates Many Fields", *Nature*, 336, 89 (1988).

3) P. Siddons, M. Hart, Y. Amemiya & J. Hastings, "X-ray Optical Activity and the Faraday Effect in Cobalt and its Compounds", *Phys. Rev. Lett.*, 64, 1967 (1990).

4) K. Wakabayashi, M. Tokunaga, I. Kohno, Y. Sugimoto, T. Hamanaka, Y. Takezawa, T. Wakabayashi, and Y. Amemiya, "Small-Angle Synchrotron X-ray Scattering Reveals Distinct Shape Changes of the Myosin Head During Hydrolysis of ATP", *Science*, 258, 443 (1992).

5) Y. Shinohara, N. Kawasaki, S. Ueno, I. Kobayashi, M. Nakajima, and Y. Amemiya, "Observation of the transient rotator phase of n-Hexadecane in emulsion droplets by small- and wide-angle X-ray scattering", *Phys. Rev. Lett.*, 94, 097801 (2005).

6) Y. Shinohara, K. Kayashima, Y. Okamura, C. Zhao, K. Ito, and Y. Amemiya, "Small-Angle X-ray Scattering of the Pully effect of Slide-Ring Gels", *Macromolecules*, 39, 7386 (2006).

### 大学院情報理工学系研究科

#### 下山 勲 教授

(任期：平成19年4月1日～平成21年3月31日)



1977年3月 工学部卒業

1982年3月

大学院工学系研究科

博士課程修了

1998年10月

教授 (工学系研究科)

所属：知能機械情報学専攻・知能

機械構成学講座

専門分野：マイクロシステム、ロボティクス

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

Hiroaki Onoe, Murat Gel, Kazunori Hoshino, Kiyoshi Matsumoto, Isao Shimoyama, "Direct Measurement of the Binding Force between Micro-Fabricated Particles and a Planar Surface in Aqueous Solution by Force-Sensing Piezoresistive Cantilevers," *Langmuir*, vol. 21, no. 24, pp. 11251-11261, 2005.

Sumito Nagasawa, Isao Shimoyama, "Calcium Concentration Measurement by Local Fluorescent-dye Injection," *Sensors and Actuators B*, vol. 102, no. 1, pp. 7-13, 2004.

I. Shimoyama, T. Yasuda, H. Miura, Y. K. Fujisawa, Y. Ezura, "Mobile Microrobots," *Robotica*, vol. 469-476, part 5, pp. 469-476, 1996.

K. Suzuki, I. Shimoyama, H. Miura, "Insect-Model

Based Microrobot with Elastic Hinges,” *Journal of Microelectromechanical Systems*, vol. 3, no. 1, pp. 4-9, 1994.

Hirofumi Miura, Isao Shimoyama, “Dynamic Walk of a Biped,” *The International Journal of Robotics Research*, vol. 3, no. 2, pp. 60-74, 1984.

## 医科学研究所

### 清木 元治 教授

(任期：平成19年4月1日～平成21年3月31日)



昭和48年3月

金沢大学薬学部卒業

昭和52年3月

大阪大学大学院薬学研究科修了

昭和56年3月

金沢大学大学院医学研究科

単位取得退学

昭和63年10月

教授 (金沢大学)

平成9年4月

教授 (医科学研究所)

所属：腫瘍細胞社会学分野

専門分野：分子生物学、病態医化学

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

Itoh Y, Takamura A, Ito N, Maru Y, Sato H, Suenaga N, Aoki T, Seiki M. Homophilic complex formation of MT1-MMP facilitates proMMP-2 activation on the cell surface and promotes tumor cell invasion. *EMBO J* 2001;20:4782-93.

Kajita M, Itoh Y, Chiba T, Mori H, Okada A, Kinoh H, Seiki M. Membrane-type 1 matrix metalloproteinase cleaves CD44 and promotes cell migration. *J Cell Biol* 2001;153:893-904.

Uekita T, Itoh Y, Yana I, Ohno H, and Seiki M. Cytoplasmic tail-dependent internalization of MT1-MMP is important for its invasion-promoting activity. *J Cell Biol*. 2001; 155:1345-56

Mori H, Tomari T, Koshikawa N, Kajita M, Itoh Y, Sato H, Tojo H, Yana I and Seiki M. CD44 directs MT1-MMP to lamellipodia by associating with its hemopexin-like domain. *EMBO J* 2002;21: 3949-59.

Itoh, Y and Seiki, M. MT1-MMP: a potent modifier of pericellular microenvironment. *J Cell Physiol*. 2006; 206: 1-8

Special Issue edited by Seiki M. Membrane-Associated Proteases. *Cancer Metastasis Reviews*. 2003; 22.

## 史料編纂所

### 横山 伊徳 教授

(任期：平成19年4月1日～平成21年3月31日)



昭和54年3月

東京大学文学部国史学科卒業

昭和56年3月

東京大学大学院人文科学研究科

国史学専門課程修士課程修了

平成12年4月 教授昇任

所属：近世史料部門

専門分野：幕末維新対外関係史

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

「幕末対外関係史の前提について」(2006年)

『オランダ商館長の見た日本』(編著、2005年)

「18-19世紀転換期の日本と世界」(2005年)

「19世紀日本近海測量について」(2001年)

*The Dutch-Japanese relations in the Bakumatsu Period - the Monthly Reports of J. K. de Wit, the First Dutch Consul General in Japan.* (1994年)

## 海洋研究所

### 西田 睦 教授

(任期：平成19年4月1日～平成21年3月31日)



1972年3月

京都大学農学部卒業

1977年3月

京都大学大学院農学研究科

博士課程修了

1996年4月

教授 (福井県立大学)

1999年4月

教授 (海洋研究所)

所属：海洋生命科学部門

専門分野：分子海洋生物学、分子進化生物学

研究内容 (代表的な著書や論文等) :

1) M. Miya and M. Nishida (1997) Speciation in the open ocean. *Nature*, 389: 803-804.

2) Y. Kumazawa and M. Nishida (2000) Molecular phylogeny of osteoglossoids: a new model for Gondwanian origin and plate tectonic transportation of the Asian arowana. *Mol. Biol. Evol.*, 17: 186-187.

3) J. G. Inoue, M. Miya, K. Tsukamoto and M. Nishida (2003) Basal actinopterygian relationships: a mitogenomic perspective on the phylogeny of the "ancient fish". *Mol. Phylogenet. Evol.*, 26:110-120.

4) Y. Hashiguchi and M. Nishida (2006) Evolution and origin of vomeronasal-type odorant receptor gene repertoire in fishes. *BMC Evol. Biol.*, 6: #76.

5) K. Mabuchi, M. Miya, Y. Azuma and M. Nishida (2007) Independent evolution of the specialized pharyngeal jaw apparatus in cichlid and labrid fishes.

## 先端科学技術研究センター

宮野 健次郎 教授

(任期：平成19年4月1日～平成22年3月31日)

1970年 工学部卒業

1974年 ノースウエスタン大学修了 Ph.D.

1991年 教授（工学部）

所属：フォトニクス材料分野

専門分野：物性物理学実験

研究内容（代表的な著書や論文等）：

Y. Uozu, Y. Wakabayashi, Y. Ogimoto, N. Takubo, H. Tamaru, N. Nagaosa, and K. Miyano, "Intrinsic colossal magnetoresistance effect in thin-film Pr<sub>0.5</sub>Sr<sub>0.5</sub>MnO<sub>3</sub> through dimensionality switching", Phys. Rev. Lett. 97, 037202/1-4 (2006).

K. Munakata, N. Takubo, H. Tamaru, and K. Miyano, "Inhomogeneous transport properties in phase-separated manganite thin films", Appl.Phys. Lett. 89, 052105/1-3 (2006).

『伝えるための理工系英語』サイエンス社 (2003)

## 部局長退任の挨拶

### 助走の時期

前大学院法学政治学研究科長・法学部長  
高橋 宏志

研究科長の任期3年間、法学政治学研究科内外の多くの方々に大変お世話になりました。あつく御礼申し上げます。

法学政治学研究科のこの3年間は、法人化とともに、法科大学院と公共政策大学院（経済学研究科と合同で支援）の起ち上げの時期と重なりました。それを、天は自ら助くる者を助くという精神で運営してまいりました。また、学問に携わるものとしての「誇り」を失わないようにも努めてまいりました。法学政治学を学ぶ者は、ある種のストイシズムを身に付けているべきなのですが、それを曲がりなりにも実践してきたつもりであります。福沢諭吉のいうやせ我慢であり、独立自尊ですが、しかし、やせ我慢が少し過ぎたかもしれません。

法人化も3年を過ぎました。法学政治学研究科もそろそろ助走の時期を終えたのかもしれません。大学全体の中で、一部局として、更に貢献することを次の研究科長に託します。

### 医学系研究科長を退任するにあたって

前大学院医学系研究科長・医学部長  
廣川 信隆

私は平成15年4月から平成17年3月、平成17年4月から平成19年3月の2期にわたり、医学系研究科長を務めました。医学系研究科長として私が一番大切にしたいことは、各教室の研究・教育のアクティビティを上げることです。世界をリードする研究を行って情報を世界に発信する、それと同時に医学部・大学院の教育課程を充実させて優れた若い世代を育てる、このことが医学系研究科にとっていつの時代にも最も大切なことであると思います。その結果、医学系研究科は、日本の生命科学にかかわる研究科の中でも非常にアクティビティの高い研究組織となり、かつ国際的にも先駆的な研究教育拠点として発展してきたと思います。あとは、研究科の運営の執行部体制による近代化、新しい建物の完成による研究環境の改善、疾患生命工学センターの確立、大学院公共健康医学専攻の設立など、又、全学的には、東京大学生命科学研究ネットワークの設立などに関わってきました。私がこれらのことに努力できたのも医学系研究科の執行部会をはじめとする教職員の方々、総長をはじめとする東京大学本部の方々、そして全学の科所長の方々の温かい御支援のおかげであり心から感謝いたします。東京大学の学問の府としてのさらに大きな発展を祈って退任のご挨拶とします。

## 退任にあたって

### 前医学部附属病院長 永井 良三

平成15年から2期病院長を務めました。この間、法人化、新臨床研修制度、包括診療報酬制度が導入され、また社会からも医療安全を厳しく求められた時代でした。さらに先進医療のあり方や看護師増員問題など、東大病院の発言や行動が社会から大きく注目されることもありました。おそらく医療の歴史の中で昭和40年代の医学部紛争に並ぶ激動の時代であったことは間違いありません。

東大病院はかつての苦い経験を踏まえ、30年以上の間、大学病院のあり方について議論をしてきました。時間をかけただけに周到な準備の上で、この難局に臨むことができました。新病棟や中央診療棟の竣工もあいまって、激動のエネルギーを新たな発展の力に変換することができたように思います。しかしながら、今後も運営費交付金削減や病院集約化など課題が山積しております。これまでの学内外の皆様のご支援に感謝申し上げますと共に、今後のご指導をよろしくお願い申し上げます。

## 立つ鳥跡をごまかす

### 前大学院人文社会系研究科長・文学部長 高橋 和久

在任期間中、優しいことばや微笑みを送って下さった方、或いはあたたかく無視して下さった方、皆様に心からお礼申し上げます。そうした方々の理解しがたい無根拠の愛に支えられて空元気を維持することが出来ました。空元気の内実は、ありそうもないことですが、ヴィジョンも定見も持ち合わせていないわたしのおつとめが万が一、大過ないものと認定されるのだとしたら、東京大学も捨てたものではない、という怪しげな感覚です。いや、こんな偉そうな発言をするところをみると、どうやら完全に自分を見失っているようです。2年前、何も分からないまま右往左往を繰り返すうち、これではいけないと反省したのが運のつき。うっかり主体性など確立するものではありません。主体的に選び取った行動は、気づいてみれば右顧左眄。疲れた挙句、結局いまは前後不覚。そんな不埒な振舞いの繰り返しでした。辛抱頂いた皆様に重ねて感謝申し上げます。あとは沈黙。

## 退任にあたって

### 前大学院理学系研究科長・理学部長 岩澤 康裕

2005年4月に理学系研究科長・理学部長の任について以来あつという間の2年間でした。実に不思議な感覚を味わっているこの頃です。それまで以上に東京大学を誇りに思うと同時に深く憂い心配もした2年間でもありました。また、東京大学の強さと魅力を味わうことが出来たと同時に致命的な弱さと脆さをも認識した2年間であ

りました。部局内においては教職員の皆様のご理解とご協力により様々な取組が実現されております。大学の存在の意義と価値、期待感と駆動力は何なのか、この極めてシンプルな問いかけに産官学社会が混沌としているように見えます。化学反応の究極体系である頭脳を勝ち取るまでに進化した我々人類が地球上で今後も継続して生活し発展できるために、頭脳集団としての大学の果たすべき役割は極めて大きい。東京大学は継続して真の人材を育成し輩出される拠点であることが求められています。国内外の若者からみて本当に魅力ある研究教育環境を整備して、頭脳を結集して不断の活性化を図ることが肝要かと思えます。皆様に支えて頂きながら研究科長・学部長を務めることができましたことに深く心から感謝申し上げます。これからは一研究者として精一杯東京大学の発展に貢献したいと思っています。

## 退任にあたって

### 前大学院農学生命科学研究科長・農学部長 會田 勝美

「窮すれば通ず」という諺は、実は「窮すれば即ち変じ、変ずれば即ち通ず」ということであること最近知りました。法人化への準備、そして法人化への対応にも苦慮しましたが、それに加えてハラスメントや安全管理の面で窮したことが度々ありました。窮地を脱するべく藻掻いているうちに「弥生ほっとライン」や、「教育研究安全衛生マネジメントシステム」を導入することになりました。知らず知らずのうちに「変じて」いたように思います。しかし、「窮する前に変ずる」ことが如何に難しいことかも実感いたしました。上記のマネジメントシステムは「労働」という言葉を「教育研究」に換え、研究室を1ユニットとし、学生をまじえた「教育の一環」とすることをコンセプトにしました。大学における安全な教育研究の実現に少しでもお役に立てれば幸いです。4年間、多くの方々のご支援をいただきました。心より感謝いたします。ありがとうございました。

## 退任に際して

### 前大学院新領域創成科学研究科長 磯部 雅彦

平成17年4月より2年間の任期で新領域創成科学研究科長を務めさせていただきました。この間、本部役員・職員、研究科教員・柏地区事務部職員の方々をはじめと、皆様に大変お世話になりました。研究科において、新鮮で貴重な情報提供をいただいたことにより研究科の発展に向けた活動が行えたこと、窮地において周りじゅうで力強く支えてくださったことに、心から感謝いたします。全学的な教育研究活動では、生命科学、トランスレーショナルリサーチ、放射光などに関して、いわば総括委員長としての総長のリーダーシップと、実行委員長としての主査部局長という協働的な体制の下で、様々な

活動に参加することができました。柏では、特に柏国際キャンパスの実現の名の下に努力しましたが、今後とも全学からのご支援をよろしくお願い致します。

## 研究科長退任にあたって

### 前大学院情報理工学系研究科長 武市 正人

2004年度から3年間にわたり、緊張しつつも充実した日々を送らせていただきました。2001年創立の情報理工学系研究科の2代目研究科長として理念の実現に努めるとともに、運営体制面でもいくつかの試みを行いました。2005年度の創造情報学専攻の設置は研究科創立時からの懸案でしたし、21世紀COEを初めとする研究科における各種教育プログラムの実施は次代の人材育成を担う研究科の不断の活動目標だといえます。教員の方々がこのような教育研究に専念できるように各種会議を整理するとともに、研究科長直属の企画室を置いて担当職員を配置し、機動的で継続的な実行力を備えた体制をとりました。東京大学の情報分野を集結させた教育研究組織を設置しようと検討を始めて10年余になりました。3年間の研究科長在任中を含めてこの間に東京大学の発展にいくらかの貢献ができたと思えば幸いです。ご支援いただいた方々に深く感謝いたします。

## 特色ある医科学研究所であるために

### 前医科学研究所長 山本 雅

40年ほど前に大学の中で医科学研究所のあり方について二つの議論があった。ひとつは、比較的限定された明確な課題に向かって研究所の全力を集中すべきであるという考えであり、もうひとつは比較的自由に問題を取り上げ重点的に複数の柱を持って研究を行うというものがあった。東京大学のようなわが国を代表する総合大学では後者が適切であるという考えが支配的であった。研究所の名称が医科学研究所であり癌研究所や感染症研究所でない理由がここにある。この考え方は研究所に多様性に基づくロバストネスとサステナビリティを保障するものである。今医科学研究所では、個々人の独創性と能力に基づいて自由奔放に推進する研究と、目的指向型の研究が織り交ざって進められている。対外的に研究所の特徴を鮮明に表現できるのは目的指向のスローガンである。この4年間所長として医科学研究所が先端的医療開発推進の場であると言い続けたが、それは研究所に上述のロバストネス保障のメカニズムがあると確信してのことである。これからも医科学研究所は自由かつ独創的な研究推進を基盤にしてわが国の先端医療に貢献し続けるものであり、私は4月からは運営の立場を離れ、医科学研究所にロバストネス保障を担う一員としての役割を果たしたいと思う。

## 東京大学の印象がよくなった。

### 前史料編纂所長 保立 道久

正直いって「はじ多し」ではあるが、ともかく所長という不向きな役職をつとめることができたのは、研究所長懇談会での理系の所長との交友の楽しさのためであった。史料編纂所のことを心配してくれ、本当にお世話になった。感謝の一言につきる。理系の所長たちも別世界の話を聞くのはおもしろかったようで、尊敬する老僧に御願ひして、通常は立ち入ることのできない京都大徳寺の真珠庵（一休さんの御寺）に、東大研究所長・同事務長ご一行様で行った時は、本当に喜んでくれた。もちろん、東京大学というのは、社会的・経済的役割からいって要するに東京工科大学であるということを思い知らされたのは、大げさにいえば人生観にも関わる経験であったが、それでも軟着陸できたのは、（総長をふくめて）理系の研究者のトップたちの明るい性格による。最後の懇親会でもいったことだが、任期終了後、しばらく自分の研究をやらせてもらった後には、本当の意味での「文理連携」のために歴史家として若干のご奉仕ができればよいと考えている。

## 退任にあたって

### 前海洋研究所長 寺崎 誠

陸中国立公園の中央に位置する風光明媚な地、大植の国際沿岸研究センターの教授から所長に着任してからあっと云う間に2年間に過ぎたというのが実感です。法人化後の部局長というものがあるに多忙とは思いませんでした。小宮山総長、西尾副学長、柏地区部局長、財務部、施設部の皆様の絶大なるご支援で、20年来の悲願であった移転が決まり感謝いたします。また一昨年の暮に有志4名で立ち上げた東京大学海洋アライアンスの活動も軌道にのったので今後は楽しみです。小職は今月末で定年退職いたしますが、東京大学の益々の発展を祈っております。皆様本当にお世話になりました。

## 「先端」的な試み

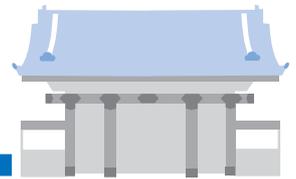
### 前先端科学技術研究センター長 橋本 和仁

三年前の法人化と時を合わせて、先端研は全学共同利用施設から附置研究所へと変わっています。そこで本来は「先端科学技術研究センター」から「先端科学技術研究所」と名称変更するべきなのですが、我々はあえて従来通りの名前を使っています。これは附置研となっても先端研のミッションは変わらず、研究内容だけでなく、組織運営の形態や制度などにおいても、全学に先駆けた「先端的な」試みをしていこうとの意思表示です。運営費交付金が漸減し、競争的資金にシフトしていく中で、「東京大学はどこを守り、どこを変えていくべきな

のか?」、さまざまな考えがあり、今後議論されていく中で、先端研は実践的な試みを続けていくことでしょう。温かい目で見守っていただきたいと思います。

一方、所長として過ごしたこの三年間は、教育・研究からはほとんど離れ、マネジメントや雑事に追われていました。しかし、この間、さまざまな部局の先生方とお話しする機会を多く持つことができ、東京大学の持つ「質の高い多様性」を肌で感じることができました。これは今後の自分の教育・研究者人生で、大変貴重な財産になると確信しています。本当に有難うございました。

## 部局 ニュース



### 地球観測データ統融合連携研究機構



部局

『第2回アジア水循環シンポジウム』  
の開催とアジアにおける「水」問題  
へのチャレンジ

地球観測データ統融合連携研究機構 (EDITORIA) の主催により、1月9日(火)10日(水)に小柴ホールにて「第2回アジア水循環シンポジウム」が開催された。本シンポジウムには、アジア地域を中心に世界29カ国から176名の水循環分野の研究者、政策決定者が参加し、各国代表による水問題の報告を踏まえ、アジア地域共通性や、問題解決に向けて地球観測の利用と能力開発の重要性が議論され、共同研究開発計画の基本方針、データポリシー、スケジュールおよび実施体制などが合意された。本会議のプレゼンテーション資料、および議事録は、以下のURLから一般公開されている。

<http://www.prime-intl.co.jp/awcs07/>

第3回地球観測サミット(ブリュッセル、2005年2月)以来、健全な意思決定の基礎となる地球情報の提供と利用に向けた地球観測に関する政府間会合(GEO: Group on Earth Observation)の枠組みの下で、全地球観測システム(GEOSS: Global Earth Observation System of Systems)の構築が進められており、水問題はGEOSSが対象とする9つの公共的社会利益分野の1つとして位置づけられています。わが国では、総合科学技術会議で採択された「地球観測の推進戦略」において水問題は喫緊に取り組むべき課題として取り上げられており、とりわけアジア各国との連携が非常に重視されています。

以上の趣旨を踏まえ、2005年1月に第1回アジア水循環シンポジウムが本学鉄門講堂にて開催され、第1回シンポジウムでは、アジア各国の水問題およびその取り組みが紹介され、観測の統合化、データの相互運用性と効果的な管理、解析をアジア各国が協力して実施する「GEOSSに貢献するアジア水循環イニシャチブAWCI (Asian Water Cycle Initiative)」の設立が合意されました。さらに昨年9月にバンコクにて第1回国際タスクチーム会合を開催し、デモンストレーションプロジェクトならびにデータポリシーについて議論を深めました。

このような経緯を経て、今回の第2回シンポジウムでは、アジア18各国(バングラディシュ、ブータン、カンボジア、中国、インド、インドネシア、日本、韓国、ラオス、モンゴル、ミャンマー、ネパール、パキスタン、フィリピン、スリランカ、タイ、ウズベキスタン、ベトナム)における水災害(洪水・地すべり、旱魃など)、

水不足、水質、河川・水管理、気候変動への影響などの各国の問題が報告されるとともに、AWCIでのデモンストレーションプロジェクトが各国より提案されました。そこで、対象となる流域の基準、データポリシーおよびスケジュールについて基本的合意に達し、各国に1流域ずつデモンストレーションプロジェクト流域を設定し、関連する能力開発をも含めたプロジェクトの基本計画が決まりました。そこで実施計画文書を策定し、プロジェクトを具体化するために、アジア各国、国連大学、ユネスコ機関、メコン委員会、宇宙航空研究開発機構など、それぞれの代表1名による国際タスクチームが組織され、EDITORIAが事務局機能を支援することが承認されました。

本シンポジウムは、地球観測政府間作業部会GEO、文部科学省、宇宙航空研究開発機構、海洋研究開発機構の共催、国土交通省、農林水産省、地球温暖化観測推進事務局（環境省/気象庁）、地球変動研究のためのアジア太平洋ネットワーク（APN）の後援を得て、実施されました。ここに記し、謝意を表します。

地球観測データ統合連携研究機構  
機構長 小池 俊雄

地球観測データ統合連携研究機構（EDITORIA）：  
<http://www.editoria.u-tokyo.ac.jp/>  
GEOSS：  
<http://www.earthobservations.org/index.html>



世界29カ国から179名の参加者がありました

**大学院教育学研究科・教育学部**

**留学生懇談会（茶の湯とファッションショー）開催される**

**部局**

1月24日（水）、教育学部・教育学研究科の留学生懇談会が山上会館で開かれ、教職員、留学生とその家族、それに日本人大学院生、あわせて70余名が参加してなごやかに歓談の一夕を過ごしました。

この時期に留学生懇談会を開くのは恒例ですが、今年は例年にも増して華やかな会になりました。一つには、留学生に呼びかけて手持ちの民族衣装を持参してもらっ

たということがあります。中国、韓国、モンゴル、トルコ、メキシコなど、会場には色鮮やかな民族衣装があふれちょっとしたファッションショーのようになりました。日本側からも、振り袖やサムライ風の羽織袴が登場しました。

もう一つ華を添えたのは、日本人大学院生の伝で、裏千家流のお三方がボランティアで茶室コーナーをしつらえて本格的なお茶をふるまってくれたことでした。コーナーには掛軸がかけられ、花が生けられ、香が焚かれて茶室そのままの雰囲気。留学生にとっても日本人にとっても、日本のハイカルチャーの一端を経験する貴重な機会になりました。掛軸には、「関 南北東西活路通」（困難を越えれば四方に道が通じる）と、留学生へのメッセージがしたためられていました。壇上でご挨拶もしていただきましたが、その立ち居振る舞いが実に立派で美しく、「教養」という言葉の意味を再確認した次第でした。

留学生の自己紹介や楽しいクイズもあり、大いに交流の実を挙げる懇談会となりました。



民族衣装で



茶室コーナーにて

## 宇宙線研究所

部局

### 重力波研究推進覚書締結シンポジウムの開催

2月28日(水) KKRホテル東京(旧竹橋会館)において、本学宇宙線研究所、自然科学研究機構国立天文台、高エネルギー加速器研究機構の3機関による大型重力波望遠鏡(LCGT)計画の推進を支援するための覚書の締結が執り行われました。

重力波研究推進のための3機関による支援は、平成6年8月に本学宇宙線研究所長、国立天文台長、高エネルギー加速器研究所長との間で初めて交わされた覚書(2年毎の更新)により行われてきましたが、今回の更新時期を迎えるにあたり、本学宇宙線研究所が統括するLCGT計画の推進を2機関が支援する体制に移行したものです。

締結式では、荒船元宇宙線研究所長によるこれまでの経緯の説明、古在元国立天文台長による日本の重力波研究の黎明期の活動、また、海部前国立天文台長、岡村本学理事・副学長からの祝辞が述べられました。

覚書締結式後に行われた講演会では、覚書締結に関わってきた研究者、重力波研究の指導的立場の研究者、マスコミ関係者などが参加し、重力波観測の状況並びに重力波検出器開発の現状が紹介されました。



締結式・鈴木洋一郎宇宙線研究所長の署名



来賓挨拶・古在由秀元国立天文台長のスピーチ

## 大学院総合文化研究科・教養学部

部局

### 第1回東京大学教養学部選抜学生コンサート～東京大学創立130周年記念～を開催

3月9日(金)14時より、駒場Iキャンパスの駒場コミュニケーション・プラザ北館音楽実習室において、本学学生より選抜された方々を演奏者とする演奏会が開催されました。プログラムは以下の通りです(所属は演奏会開催時のものです)。

浦野 慶(農学部応用生物学専修) ピアノ  
ロベルト・シューマン アベック変奏曲 作品1

清木美帆(農学部地域環境工学専修) ピアノ  
桐山宗久(教養学部基礎科学科分子科学分科) フルート  
セザール・フランク ソナタより 第1, 4楽章 イ長調  
(原曲はヴァイオリンソナタ)

大澤 悠子(文科三類) ピアノ  
J. S. バッハ 平均律クラヴィーア曲集 第2巻より 前奏曲とフーガ 第22番 変ロ短調 BWV 891  
C. C. プロコフィエフ ピアノ・ソナタ 第3番 「古いノートから」 イ短調 作品28

岐部 琴美(理科二類) ピアノ  
J. S. バッハ イギリス組曲 第4番 へ長調 BWV809 より 第1曲 前奏曲  
M. H. グリンカ=M. A. バラキレフ 歌曲「ペテルブルグへの別れ」より 第9曲「ひばり」

若井優也(工学部) ピアノ  
外山侑樹(教養学部) アルト・サクソフォン  
ブランフォード・マルサリス 「ドクトーン」  
ジェローム・カーン 「歌こそは君」

曲目はバロックからジャズまで、演奏形態もピアノ独奏3名に管楽器とのアンサンブル2組という聴衆を飽きさせないプログラムで、中には勉学のかたわら研鑽に励んだだけとは思えない腕前の演奏者もいました。

大学院総合文化研究科・教養学部は、昨年、(株)松尾楽器商会などのご厚意で、学生の皆さんのために使うことを目的にスタインウェイフルコンサートグランドピアノを購入しました。本演奏会の前にもこのピアノを用いた催しは何回か開催されましたが、学生を演奏者とする試みは今回が初めてでした。

本演奏会のためのオーディションの開催は、昨年末に告知されました。準備期間が短かったにもかかわらず10組の奏者が果敢にエントリーし、1月19日(金)、総合文化研究科の教員からなる審査委員会の前で演奏を披露しました。その結果、上記の5組の演奏者が選抜されま

した。

演奏会のポスター・チラシの作成は、創立130周年記念事業としての援助を受け、駒場博物館のスタッフの協力のもとに行われましたが、原稿は演奏者が執筆しました。当日配付されたプログラムも演奏者が作成したほか、リハーサル・会場設営・当日受付などの裏方も演奏者が引き受けました。特に、演奏者3組が所属する室内楽サークルの皆さんが献身的にご協力くださいました。

当日は、演奏者のご家族や友人などを中心に100名ほどの聴衆が集まりました。まずまずの盛会となりましたが、オーディションの告知をもう少し早める（本番の最低6週間前にしてほしいという意見がありました）、準備も演奏者が担当するという性格を周知させる必要がある、演奏者同士がはじめてから協力し、全員が準備を分担できるよう、何回かは打合せの場を設ける必要がある等々、今後のさらなる発展に向けた反省もあります。

教養学部選抜学生コンサートは、今後も引き続き行われる予定です。第2回は11月10日（土）のホームカミングデー（創立130周年記念式典も行われます）での開催を予定しており、そのためのオーディションは9月に実施される予定です。オーディションや演奏会のお知らせは教養学部のホームページ（<http://www.c.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>）などに掲載されますので、ご関心のある向きはぜひご注意ください。



演奏者および関係者の記念スナップ

大学院農学生命科学研究科・農学部  
救急救命講習を開催

3月19日（月）、大学院農学生命科学研究科において、教職員・学生を対象とした普通救急救命講習を開催した。本郷消防署による応急手当の重要性や救命処置の講義、人形を使用した人工呼吸・心臓マッサージの心肺蘇生（CPR）訓練等を行なった。

近年、公共機関等で設置が増えているAED（自動体

外式除細動器）についても詳細に説明を受けた。AEDは電源を入れると音声で指示を出し、内臓コンピュータが自動的に心停止者の症状を解析するので、操作者は言われた通りにボタンを押すだけでよい。受講者の1人は、「これまでAEDの操作は難しいものと思っていたが、想像以上に簡単なので驚いた」と述べていた。

弥生キャンパス内には現在、4箇所にてAEDを設置している。多くの方が救急救命講習を受講し、AEDを使用した救命手当により「尊い命」が救われることを期待している。



心肺蘇生法の指導を受ける様子

大学院総合文化研究科・教養学部  
国際シンポジウム「国際標準の学部  
初年次教育実現へ向けて」開催される

3月26日（月）13時から、文部科学省平成18年度大学教育の国際化推進プログラム（海外先進教育実践支援）の取組みの一環として、「国際標準の学部初年次教育実現へ向けて—教員・職員・学生の新しい連携の形—」と題する国際シンポジウムが、本学部18号館ホールで開催された。

そもそも耳慣れない「学部初年次教育」とは、First-Year ExperienceやFirst-Year Programなどと呼ばれ、次のような取組みのことをいう。新入生は、大学という新たな環境に移行し、キャンパスライフや学習面において適応しなければならない。その移行の際に生ずる様々な問題（移行問題）の解決を大学が組織的に支援し、教育効果を高めることを目的とした取組みである。アメリカなどの先進的な取組みと比較すると、日本の大学ではこのような移行問題への支援の必要性についての意識が全体としてはまだ希薄であり、立ち遅れているのが現状である。

東京大学は教養学部を擁する唯一の国立大学法人であり、日本の大学における1～2年次教育の理想型を常に創造し、発信してきたという自負がある。これまでの本学部の先進的な取組みを国際標準のレベルへ向上させ、国内に発信するため、文部科学省により昨年4月に採択

された『大学教育の国際化推進プログラム（海外先進教育実践支援）』として、11月にハーバード大学とペンシルバニア州立大学に本学の教職員を派遣し、両大学の教職員と密接に協力し合い実際の講義や業務を体験する、新しいタイプの研修を実施した。

本シンポジウムは、この研修の成果を報告し、日本の大学への学部初年次教育プログラムの導入について議論を深めることを目的として開催された。



(写真・左) 開会の挨拶をする古田理事・副学長  
(写真・右) ハーバード大学初年次教育部長Tom Dingman教授

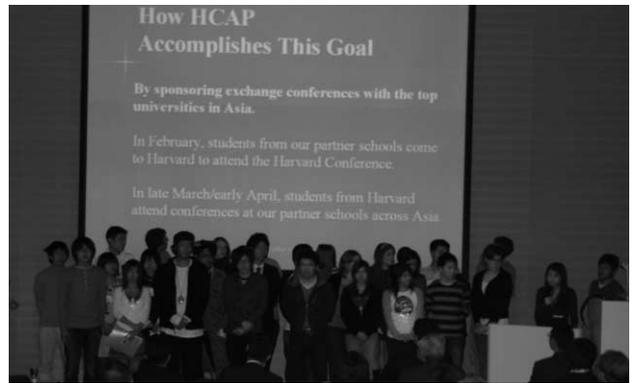
シンポジウムは、研修の団長も務めた本学部の繁榊算男教授の司会により、古田元夫理事・副学長による開会の挨拶に続いて、ハーバード大学初年次教育部長のTom Dingman氏による「国際標準の初年次教育を日本にどのように導入するか？」と題する基調講演が行われた。

次いで、本学部附属教養教育開発機構の山本泰教授により「駒場における初年次教育」と題する講演が行われ、その中では、職員が発案し学生が質問票を作成した「初年次教育ニーズ調査」の結果報告や、本学の学生も関わった新入生オリエンテーション「FRESH START@駒場」、本学の学生とハーバード大学の学生との自主的な交流によるヒューマンネットワークの構築を目的とした「HCAP」(Harvard College in Asia Project)などの取組みに関する紹介も行われた。



研修の成果を発表する職員

休憩の後、研修に参加した職員により「ハーバード大学とペンシルバニア州立大学の初年次教育」と題して研修成果の報告が行われ、引き続き聴衆も加わっての総合討論が行われた。



HCAPの学生の面々

総合討論では、全国各地から参加した学部初年次教育にたずさわる教職員や教育関係者、さらには学生も加わり活発な質疑応答や意見交換がなされた。そして最後に西中村浩副学部長の閉会の挨拶で盛会のうちに終了した。

約150人が参加し、およそ4時間にわたって行われた本シンポジウムでは、本学の教員・職員・学生の新しい連携による「学部初年次教育」の取組みに対して非常に大きな関心と期待が寄せられた。改めてこの問題に関する重要性を認識する次第である。



調査結果を発表する学生

大学院総合文化研究科・教養学部

FRESH START@駒場

3月29日(木)13時から、本学部18号館ホールにおいて、本学部附属教養教育開発機構の主催による、本年4月の入学予定者約120名を対象とした「FRESH START@駒場」が開催された。

このイベントは、初年次教育を充実するために教職員・学生が協力して企画したものであり、新入生の大学への移行をスムーズにするオリエンテーションとして、また、教職員と学生の連携の新たなモデルとして、今年が初めての試みとして実施したものである。

当日は、18号館ホールにおいて、小島憲道教養学部長による開会挨拶の後、(財)新国立劇場運営財団理事長で元文部科学大臣の遠山敦子氏による「学びのすすめ」と題する特別講演が行われた。講演終了後には、参加者との活発な質疑応答も行われ、同氏からは、学ぶ上での心構えなどについて、貴重な体験談を交えた多くの示唆

に富む発言がなされた。また当日は、本学の国際シンポジウムのために来日されたハーバード大学Tom Dingman初年次教育部長から、帰国国際の忙しいスケジュールの合間を縫っての「飛び入り」での挨拶もあった。



(18号館ホールで)  
左：開会の挨拶をする小島憲道教養学部長  
右：遠山敦子元文部科学大臣の特別講演

引き続き、入学予定者は各10名前後の12グループに分れ、それぞれのグループに本学部教職員と各学部から参加した学生が加わり、グループ毎に工夫した駒場キャンパスのツアーや、教室、教員の研究室、コミュニケーション・プラザなどにおいて、思い思いの行程での時間を共有し、交流と親睦を深めた。このグループ活動は新入生にも特に好評であった。



(グループ行動) 教員を囲んでの質疑応答

その後、全員が900番教室に集合し、本学部のヘルマン・ゴチェフスキー助教授によるパイプオルガン演奏にしばし心を洗われた。また、運動会応援部による応援歌の紹介を兼ねた力強いパフォーマンスにびっくりしながらも、最後に、このイベントに関った教職員・学生運営スタッフの紹介が行われ、教養教育開発機構の山本泰教授の挨拶により、和気あいあいとした雰囲気の中で17時頃散会した。



(900番教室に全員揃い)  
応援部のパフォーマンス



パイプオルガンに  
聴き入る参加者



今回の企画を支えた先輩たち

ニュースページ、インフォメーションページに掲載する記事をお寄せください！

「学内広報」は皆さんから送っていただく記事で作られています。下記の方法により、積極的に学内の情報をお寄せください。

#### 1. 提出方法

記事は、各部署の広報担当者を通して、メールの添付ファイルとしてデータで送付してください。

#### 2. 原稿締切日

原則として各月第1・3水曜日。ただし祝日等により変更となる場合があります(本学HPの右下にある「学内広報アイコン」をクリックし、発行スケジュールを確認してください)。

#### 3. 原稿の書式等、提出の際の留意事項

本学HPの右下にある「学内広報アイコン」をクリックし、記事提出要領をご覧ください。

※編集スケジュールの都合上、原則として校正はできません。基本的にはいただいた原稿がそのまま掲載されますので、内容に間違いのないよう、十分ご注意ください。

#### 4. 問い合わせ先・提出先

総務部広報課広報企画チーム  
TEL：03-3811-3393 内線22031  
E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

# キャンパス ニュース



学生部

**第2次学力試験（前期日程）の合格者、同（後期日程）第1段階選抜結果の発表**

平成19年度本学入学者選抜の第2次学力試験（前期日程）の合格者2,768人の受験番号及び第2次学力試験（後期日程）の第1段階選抜合格者の大学入試センター試験試験場コード・受験番号が3月10日（土）12時30分頃、本郷構内で掲示により発表された。また、併せて、合格者の科類別成績（最高点・最低点・平均点）も発表された。  
 なお、各科類の合格者数等は次のとおりである。

## 第2次学力試験（前期日程）合格者数等

科 類	募集人員	合格者数	最高点	最低点	平均点
文科一類	373	373	444.4093	344.8205	370.5808
文科二類	327	328	442.0315	330.8539	352.5848
文科三類	432	434	408.9982	322.6983	344.3239
理科一類	1,025	1,045	456.7758	310.5983	342.0262
理科二類	492	508	396.5203	304.6760	331.4719
理科三類	80	80	473.2537	385.6870	413.4744
合 計	2,729	2,768			

## 第2次学力試験（後期日程）第1段階選抜合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	倍 率	第1段階選抜			合格者科類別成績		
				合格者数	不合格者数	不合格者数のうち本学前期日程合格による者	最高点	最低点	平均点
文科一類	42	791	18.8 (11.5)	210	581	306	582	535	548.07
文科二類	38	666	17.5 (10.6)	197	469	265	482	441	452.72
文科三類	53	1,064	20.1 (14.6)	271	793	291	572	532	542.41
理科一類	122	2,341	19.2 (10.8)	611	1,730	1,018	498	458	469.88
理科二類	59	637	10.8 (8.1)	306	331	157	491	435	452.65
理科三類	10	153	15.3 (12.6)	53	100	27	497	476	485.32
合 計	324	5,652	17.4 (1.1)	1,648	4,004	2,064			

注：倍率欄の（ ）内は本学前期日程試験合格者数を除いた倍率



学生部

第2次学力試験（後期日程）、外国学校卒業学生特別選考の合格者発表

平成19年度本学入学選抜の第2次学力試験（後期日程）の合格者329人及び外国学校卒業学生特別選考合格者第1種（外国人であって日本国の永住許可を得ていない者）の合格者14人、第2種（日本人及び第1種以外の外国人）の合格者22人の受験番号が、3月21日（水）12時30分頃に、本郷構内で掲示により発表された。また、併せて、合格者の科類別成績（最高点・最低点・平均点）も発表された。なお、各入試の合格者数等は、次のとおりである。

平成19年度第2次学力試験（前期日程・後期日程）募集人員・合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数
文科一類	415	2,293	1,332	1,294	415
文科二類	365	1,731	1,179	1,152	366
文科三類	485	2,661	1,580	1,540	488
理科一類	1,147	5,353	3,177	3,031	1,170
理科二類	551	2,583	2,034	1,967	568
理科三類	90	563	373	364	90
合 計	3,053	15,184	9,675	9,348	3,097

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

平成19年度第2次学力試験（前期日程）募集人員・合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	合格者科類別成績		
						最高点	最低点	平均点
文科一類	373	1,502	1,122	1,108	373	444.4093	344.8205	370.5808
文科二類	327	1,065	982	979	328	442.0315	330.8539	352.5848
文科三類	432	1,597	1,309	1,305	434	408.9982	322.6983	344.3239
理科一類	1,025	3,012	2,566	2,559	1,045	456.7758	310.5983	342.0262
理科二類	492	1,946	1,728	1,719	508	396.5203	304.6760	331.4719
理科三類	80	410	320	316	80	473.2537	385.6870	413.4744
合 計	2,729	9,532	8,027	7,986	2,768			

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

平成19年度第2次学力試験（後期日程）募集人員・合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	合格者科類別成績		
						最高点	最低点	平均点
文科一類	42	791	210	186	42	305	258	271.79
文科二類	38	666	197	173	38	281	203	230.26
文科三類	53	1,064	271	235	54	290	215	239.31
理科一類	122	2,341	611	472	125	452	339	364.88
理科二類	59	637	306	248	60	331	249	269.50
理科三類	10	153	53	48	10	315	268	283.85
合 計	324	5,652	1,648	1,362	329			

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

平成19年度外国学校卒業学生特別選考志願者数・合格者数等

科 類	区分	志願者数	第1次選考合格者数	第2次選考受験者数	第2次選考合格者数
	種別				
文科一類	第1種	6	3	3	1
	第2種	27	14	14	7
文科二類	第1種	27	7	7	5
	第2種	32	11	8	5
文科三類	第1種	12	4	3	2
	第2種	31	10	9	3
理科一類	第1種	35	11	11	4
	第2種	16	9	8	3
理科二類	第1種	13	3	3	2
	第2種	19	15	10	4
理科三類	第1種	0	0	0	0
	第2種	3	1	1	0
合 計	第1種	93	28	27	14
	第2種	128	60	50	22

なお、過去3年間の志願者数及び合格者数、高校卒業年別の合格比率、出身校所在地別合格者及び比率は次のとおりである。

## 入学志願者数及び合格者数の推移

	平成 19 年度						平成 18 年度						平成 17 年度					
	志願者			合格者			志願者			合格者			志願者			合格者		
	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計
文科一類	1,502	791	2,293	373	42	415	1,549	923	2,472	373	43	416	1,458	785	2,243	373	43	416
文科二類	1,065	666	1,731	328	38	366	1,099	672	1,771	328	38	366	1,094	660	1,754	329	38	367
文科三類	1,597	1,064	2,661	434	54	488	1,521	981	2,502	435	54	489	1,451	923	2,374	435	54	489
理科一類	3,012	2,341	5,353	1,045	125	1,170	2,705	2,084	4,789	1,045	125	1,170	2,884	1,998	4,882	1,046	125	1,171
理科二類	1,946	637	2,583	508	60	568	2,170	639	2,809	507	62	569	1,843	603	2,446	507	62	569
理科三類	410	153	563	80	10	90	433	175	608	80	10	90	426	149	575	80	10	90
合計	9,532	5,652	15,184	2,768	329	3,097	9,477	5,474	14,951	2,768	332	3,100	9,156	5,118	14,274	2,770	332	3,102

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

## 高校卒業年別の合格比率

科 類	区 分	平成 19 年度			平成 18 年度			平成 17 年度		
		前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計
文科一類	現 役	65.7%	59.5%	65.0%	69.4%	48.8%	67.3%	67.0%	58.1%	66.1%
	1 浪	31.9	38.0	32.5	27.3	32.6	27.9	30.3	25.6	29.8
	2 浪	1.6	2.4	1.7	2.4	9.3	3.1	1.6	7.0	2.2
	3 浪以上等	0.8	0.1	0.8	0.9	9.3	1.7	1.1	9.3	1.9
文科二類	現 役	61.6	65.8	62.0	66.5	57.9	65.6	64.4	65.8	64.6
	1 浪	35.0	31.6	34.7	31.4	36.8	32.0	30.7	28.9	30.5
	2 浪	2.4	2.6	2.5	1.2	0.0	1.1	4.3	2.6	4.1
	3 浪以上等	1.0	0.0	0.8	0.9	5.3	1.3	0.6	2.7	0.8
文科三類	現 役	65.9	61.1	65.3	65.3	74.1	66.3	63.4	50.0	62.0
	1 浪	29.3	25.9	28.9	31.5	11.1	29.2	31.0	33.3	31.3
	2 浪	3.2	5.5	3.5	1.8	1.9	1.8	3.0	3.7	3.1
	3 浪以上等	1.6	7.5	2.3	1.4	12.9	2.7	2.5	13.0	3.6
理科一類	現 役	74.9	72.0	74.6	74.8	72.8	74.6	69.5	69.6	69.5
	1 浪	23.8	17.6	23.2	23.3	24.0	23.4	26.6	26.4	26.6
	2 浪	0.7	6.4	1.3	1.1	2.4	1.3	2.7	2.4	2.6
	3 浪以上等	0.6	4.0	0.9	0.8	0.8	0.7	1.2	1.6	1.3
理科二類	現 役	57.9	53.3	57.4	67.5	54.8	66.1	61.7	54.8	61.0
	1 浪	37.6	35.0	37.3	27.6	27.4	27.6	32.5	38.7	33.2
	2 浪	2.6	6.7	3.0	2.2	4.8	2.5	3.6	1.6	3.3
	3 浪以上等	1.9	5.0	2.3	2.7	13.0	3.8	2.2	4.9	2.5
理科三類	現 役	68.8	30.0	64.4	71.3	30.0	66.7	65.0	60.0	64.4
	1 浪	21.3	30.0	22.2	22.5	40.0	24.4	17.5	20.0	17.8
	2 浪	3.8	20.0	5.6	2.5	20.0	4.4	6.3	20.0	5.6
	3 浪以上等	6.1	20.0	7.8	3.7	10.0	4.5	11.3	0.0	12.2
合 計	現 役	67.4	63.2	66.9	70.2	63.6	69.5	66.1	61.4	65.6
	1 浪	29.6	26.7	29.3	26.9	25.6	26.7	29.1	29.8	29.2
	2 浪	1.8	5.8	2.3	1.7	3.9	1.9	3.0	3.0	3.0
	3 浪以上等	1.2	4.3	1.5	1.2	6.9	1.9	1.8	5.8	2.2

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

## 出身校所在地別合格者数及び比率

	平成 19 年度						平成 18 年度						平成 17 年度					
	前期		後期		計		前期		後期		計		前期		後期		計	
	合格者数 人	比率 %																
東 京	926	33.5	115	35.0	1,041	33.6	847	30.6	130	39.2	977	31.5	932	33.6	125	37.7	1,057	34.1
北海道	42	1.5	8	2.4	50	1.6	38	1.4	6	1.8	44	1.4	42	1.5	3	0.9	45	1.5
東 北	90	3.2	11	3.3	101	3.3	83	3.0	12	3.6	95	3.1	86	3.1	11	3.3	97	3.1
関 東 東京を除く	501	18.1	64	19.5	565	18.2	464	16.7	75	22.6	539	17.4	507	18.3	72	21.7	579	18.7
北 陸	103	3.7	4	1.2	107	3.5	126	4.6	5	1.5	131	4.2	96	3.5	12	3.6	108	3.5
中 部	240	8.7	28	8.5	268	8.7	308	11.1	26	7.8	334	10.8	258	9.3	26	7.8	284	9.2
近 畿	398	14.4	52	15.8	450	14.5	384	13.9	41	12.3	425	13.7	354	12.8	37	11.1	391	12.6
中 国	120	4.3	11	3.3	131	4.2	158	5.7	10	3.0	168	5.4	131	4.7	13	4.0	144	4.6
四 国	85	3.1	12	3.7	97	3.1	80	2.9	3	0.9	83	2.7	84	3.0	7	2.1	91	2.9
九 州 沖縄を含む	255	9.2	22	6.7	277	9.0	272	9.8	17	5.2	289	9.3	262	9.5	24	7.2	286	9.2
検 定 その他	8	0.3	2	0.6	10	0.3	8	0.3	7	2.1	15	0.5	18	0.7	2	0.6	20	0.6
合 計	2,768	100.0	329	100.0	3,097	100.0	2,768	100.0	332	100.0	3,100	100.0	2,770	100.0	332	100.0	3,102	100.0

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

# インタープリターズ・ バイブル vol. 1



科学技術振興調整費新興分野人材育成 科学技術インタープリター養成プログラム

近頃、学術の世界では「専門家でない人々に科学をわかるように伝えること、科学に興味を持ってもらうことが重要だ」という声が、とみに高まってきています。本学でも2005年秋に、科学と社会の間に立って通訳する人材を育成する「科学技術インタープリター養成プログラム」が大学院の副専攻として発足し、今年3月に第1期生を送り出しました。この連載では、「何を伝えるか、どう伝えるか」がキャッチフレーズであるこのプログラムの教員が、毎回、「インタープリターの極意」を語っていきます。

## タミフルにおもう

黒田玲子

総合文化研究科 教授

科学技術インタープリター養成プログラム担当

鳥インフルエンザの流行に備えて世界中で備蓄を進めているタミフルが最近大きな話題になっている。日本はタミフルの消費大国で、2005年にはインフルエンザ治療薬としての処方量が900万件もあったという。しかし、最近、10代の子供が、服用後に異常行動を起こし転落死するという痛ましい事件が報道された。厚生労働省は緊急に10代へのタミフル処方を原則禁止としたが、マスコミや一般市民の反応には賛否両論ある。10歳の誕生日直前は良いのに直後はだめなのは理解できないなどという親の意見も、ある意味ではうなずける。しかし、このように、連続した事象、グレーゾーンに無理やり線を引かざるを得ない事柄は世の中にたくさんある。また、すべての事柄にリスクとベネフィットが存在するように、すべての薬には多かれ少なかれ副作用がある。製薬会社はできるだけ副作用を減らし、薬効を高める努力をしているが、どうしても存在するリスクと、われわれは賢くつきあわなければならない。

それに、世間ではあまり議論されていないようだが、なぜ大人と同じカプセルを子供に与えるのか、ひそかに疑問に思っている。年齢に応じて量を減らした子供用の薬を投薬すれば、治療効果はあるが副作用が減るということはないだろうか？ つまり、投薬するかしないかではなく、どのくらいという定量的な把握も必要ではないだろうか？

ここではタミフルを例に挙げたが、発電・組換作物・脳死問題など多くの事柄で重要なグレーゾーン、リスクとベネフィットの理解、定量的把握などを扱っているのが、「科学技術インタープリター養成コース」である。本学の全大学院生を対象としたこのコースは、科学技術と社会の双方向性の架け橋の役割を果たすインタープリターの養成を目指している。科学の理解増進活動というと、子供たちにいかに科学の面白さを伝えるかということに重点が置かれがちだが、本学のコースは、どう伝えるかだけでなく、何を伝えるかという視点も大切にする。正しく伝えるとはどういうことか、科学的ものの考え方とはなにか、最先端の科学の現場はどうなっているかなども扱う。10月開講の副専攻であり、文系、理系の大学院生を歓迎している。

興味・関心のあるかたは、

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/>

にアクセスし、ぜひ挑戦していただきたい。



## 調達本部です



### 第25回 調達本部発足から2年

早いもので調達本部の発足から2年が経過します。この2年間は決算調査により定めた重点分野をめぐる活動でした。結局、分野ごとの対策の難易度に左右されるところとなり、印刷、移転など個別案件が先行、清掃、設備保守など年度契約となる集約案件がこれに続きました。

文房具・一般用品、OA・パソコンのように、Web発注システムの設計からとりかかる必要のあったものは、どうしても時間がかかりました。やはりWeb発注化した試薬は、安全面での特別な配慮と販売業界の状況からくる制約もあってさらに時間がかかりました。また、当初、重点分野と捉えた「派遣」や「廃棄物処理」のように対策そのものが難しいものがあった半面、コピー機、電話、実験用器具・消耗品のように新たな改善分野の開拓も行なわれました。

さて、その調達改善効果は、17年度約2億円、18年度約4億円でした。いずれも目標の10億円にはまだ遠い値ですが、生み出された効果の殆どは、別途に予算管理され全学からの「臨時予算要求」等の財源として有効に使うことができました。

調達改善効果が予算上しっかり管理できたことは、これまでの効果の殆どが本部契約で発生したことによってもいえます。調達改善は全学の取り組みなのですが、これまでのところ各部局における調達改善は目立った効果をあげていない現実があります。

調達改善3年目となる19年度、最大の課題は「部局における調達改善」の展開であり、その最大のターゲットはUT購買サイト等Web発注システムの利用拡大となります。19年度は、会計情報コード設定、カタログ外発注などに抜本的改善を施す予定となっており、調達本部もタイムリーにキャンペーンを行なっていきます。

また、大半の案件が部局での契約となる「印刷」についても、これまで本部で実際に効果の挙げたノウハウ（難しいものではありません）を部局で実践していただくことでぜひ効果をあげてもらいたいと考えています。

各部局で調達改善効果があがると、実は各部局はいかにその効果を別途の財源として捕捉し、部局内で有効に活かすかという新たな課題を背負うこととなります。本部では19年度首の予算通達にあたり、UT購買サイトの利用見込みに基づいてその効果を別途通達するという新機軸を取り入れました。各部局も部局内予算として、調達効果をどう扱うか、部局の予算管理ルールを踏まえてお考え頂きたいと思えます。

調達改善効果の目標10億円。本部契約のものでほぼ半分は達成済みといえます。あと半分「部局における調達改善」に向けて、調達本部は決意を新たにしています。

久々登場のFlags、今回は特別増刊号です！  
昨年度大活躍した運動部を一挙にご紹介します。

来年度は目標『日本一』を達成し、  
感動を巻き起こします。

ラクロス部・・・  
関東学生1部リーグ3位



空手部・・・  
東京都国公立大会優勝 七帝戦準優勝  
全国国公立大会優勝



漕艇部・・・  
インカレ男子エイト8位 京大戦対校フォア勝利  
全日本軽量級選手権女子舵手付クォドルブル7位  
東商戦9種目中8種目勝利



航空部・・・  
関東大会個人優勝（本学史上初）



「来年は部員全員のレベルアップを図りライセン  
保持者を増やすことを第一目標に、東京六大学  
関東大会、全国大会での上位入賞を目指したいと思  
います。」

フィールドホッケー部・・・  
七大戦全勝優勝  
関東学生ホッケーリーグ2部2位



アイスホッケー部・・・  
関東大学リーグ2部昇格

### その他の主な戦績

弓術部	男女ともリーグ戦3部優勝、2部昇格
競技ダンス部	東部日本学生競技ダンス選手権優勝 夏全日本選抜学生競技ダンス選手権団体3位
剣道部	国公立大会男子団体優勝・男子個人3位
硬式野球部	国公立大会準優勝
B & W部	関東学生ハワ-リフティング選手権大会団体優勝、 個人6階級で優勝または準優勝
ヨット部	J/24関東選手権大会優勝
クルーザー班	J/24全日本選手権7位

「ホッケー部は現在、2部リーグに甘んじて  
いますが、今年からはひと味違います。The  
Best History をキャッチフレーズとし、文字  
どおり史上最強、創部以来80年の伝統を誇る  
ホッケー部に、もっとも強い集団としての足  
跡を残そうと、日々がんばっています。」

編集：学生部学生課体育チーム (内)22510

## 東京大学産学連携協議会 年次総会・アドバイザーボードミーティング・フォーラム開催

### 年次総会開催

3月7日(水)15時30分より、日本経済団体連合会の経団連ホール(大手町)にて、東京大学産学連携協議会の平成18年度年次総会を開催しました。

産業界・大学併せて約250名の参加者があり、懇親会では活発な意見交換が行われて、産学の有意義な人材交流と連携促進の場となりました。総会の次第は下記の通りです。

司会：濱田 純一／東京大学理事・副学長

挨拶：小宮山 宏／東京大学総長

来賓挨拶：宮原賢次氏／日本経済団体連合会副会長

報告：「東京大学の産学連携」

藤田 隆史／東京大学産学連携本部長

招待講演：「産学連携と技術者教育への期待」

佐々木元氏／日本電気株式会社代表取締役会長

特別講演：「開かれたものづくり」とは何か

藤本 隆宏／東京大学大学院経済学研究科教授

アドバイザーボード  
ミーティングメンバー  
記念撮影  
(経団連会館)



協議会懇親会  
歓談風景  
(ダイヤモンドホール)

### アドバイザーボード・ミーティング開催

上記総会と同日(3月7日)、日本経団連にて、平成18年度第2回アドバイザーボード・ミーティングが開催されました。

冒頭の挨拶で、小宮山総長から、2006年9月に開催した前回の会議(学内広報1343号に掲載)以降の産学連携に関する取り組みとして、以下の3点について紹介がありました。

- ・(株)東京大学TL0に対する東大出資率(57.5%)の件
  - ・アントレプレナープラザの建設が順調に進んでいる件
  - ・国際的産学連携に向けての取り組みがスタートした件
- 次に、藤田隆史産学連携本部長から、東京大学の産学連携に関する活動報告がなされました。

その後、前回の会議で産業界アドバイザーから頂いたご意見に関連して東京大学が行っている取り組みとして、学術俯瞰講義、社会人教育、海外との産学連携に関する報告がなされ、前回欠席の委員からは新たなご意見等も頂きました。前回に引き続き、研究・教育、特に人材育成や文理融合について広く議論が展開し、活発なディスカッションが行われました。

出席者は右段に記載の通りです。

【産業界アドバイザー】三木繁光氏(株)三菱東京UFJ銀行会長)、宮原賢次氏(住友商事(株)会長)、和田紀夫氏(日本電信電話(株)社長)、岡村正氏(株)東芝会長)、渡文明氏(新日本石油(株)会長)、山野井昭雄氏(味の素(株)顧問)

【東京大学】小宮山宏(総長)、西尾茂文(理事・副学長)、古田元夫(理事・副学長)、岡村定矩(理事・副学長)、山田興一(理事・産学連携担当)、藤田隆史(産学連携本部長)

### 第8回科学技術交流フォーラム開催される

### 100名以上の参加者で活気あふれる



東京大学産学連携協議会主催の第8回科学技術交流フォーラム「大学のソフトウェアを世界へ」が、3月9日(金)13時より、経済学研究科棟地下大教室で開催されました。産学連携本部長の藤田隆史本部長の挨拶の後、小宮山宏総長が「大学に埋もれているソフトウェアを企業の人たちはビジネスのタネにして欲しい」と述べ、続いて、以下の来賓に御挨拶頂きました。

- ・藤木完治氏／文部科学省 研究振興局担当 審議官
- ・西川泰蔵氏／経済産業省 商務情報政策局担当 審議官
- ・川上潤三氏／株式会社日立製作所 執行役専務

フォーラムの講演内容は以下の通りです。

講演1「大学発ソフトウェア移転の課題」太田与洋教授(産学連携研究推進部長)、講演2「流れのマルチスケールシミュレーション」松本洋一郎教授(工学系研究科長)、講演3「バリューデザインの技術：「見えるツール」から「見る人間」へ」大澤幸生助教授(工学系研究科)、講演4「初心者にも使える3次元グラフィクス技術とその応用」、五十嵐健夫助教授(情報理工学系研究科)、講演5「創発の埋め込みと発現」上田次次教授(人工物工学研究センター長)、講演6「実践的ケモインフォマティクス・ソフトウェアの開発と発信」船津公人教授(工学系研究科)、講演7「革新的シミュレーションソフトウェアの研究開発プロジェクト」加藤千幸教授(生産技術研究所計算科学技術連携研究センター長)、講演8「大学ソフトウェアの産業応用の現状と将来について」高田章氏(旭硝子株式会社中央研究所 特任研究員) 調査報告「わが国の企業におけるシミュレーション技術の活用実態と人材育成」大谷泰昭氏(みずほ情報総研株式会社科学技術部長)。

聴衆は、東大のソフトウェアの先進性に大いに興味を示して聴き入っておられ、時折大歓声があがるなど、活気にあふれたフォーラムとなりました。

連絡先：産学連携本部(研究協力部 産学連携課)

電話：内線22857(外線03-5841-2857)

ホームページ：<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

※「東京大学トップページ」上で「産学連携本部」をクリック

## ワタシのオシゴト 第11回

Rings around the UT

教養学部経理課 副課長

内田良一 さん

## Armadillo

晴れた日の朝7時から9時までの間、緑豊かなキャンパスに一人乗りのオープンカーが右側通行している。名はアルマジロ、米国育ちの舶来品である。役割は道路上の空き缶、ペットボトルや紙くずなどの人工的なごみと大樹の落ち葉を食い尽くすためであり、私はその調教師である。アルマジロはサイドとメインのブラシで握り拳大の石ころをも吸い上げるという優れものであるが、濡れた道、凸凹道、未舗装道、隅の掃除は大嫌いである。

当初は学生の授業時間に合わせて作業をしていたが、本来の業務を優先すると作業時間がなくなり、また、珍しい乗り物に休講の学生が写メールを撮ったり、保育園児が立ち止まって興味深く見られているのは作業がはかどらなく、朝に切り替えてからあれこれ一年になる。作業着は着ない。私服が教養学部に入ったジャンパーである。理由は委託業者による清掃だと思われたくないためである。職員がしているということで汚さないでおこうという意識をキャンパスで生活しておられる仲間に伝えたいからである。

キャンパスが以前より綺麗になったと言われる事が明日へつながる原動力となる。出来る限りの事を永く続けたい。

もう9時か！ アルマジロを休ませ、本来の仕事につくこととする。



愛車「アルマジロ」で構内通路の清掃。。。ドライバー募集中！



マッサージで身体をほぐし、明日も元気に！！

出身地：新潟県佐渡

自分の性格：

自分でも良くわからない

血液型： AB型

次回執筆のご指名：

新井宏之さん

関係： な・い・し・ょ！

一言紹介：隣村の若手ホープ



第15回

~広報センターより~

ご案内

歴史あり！  
東京大学公開講座

平成19（2007）年、春季の公開講座がはじまりました！ 今回で、第106回を数えますが、ここで、公開講座の歴史について少しだけ触れてみたいと思います。

東京大学の公開講座は、昭和20（1945）年11月から12月にかけて、法学部独自の企画である【大学普及講座】が開かれたことに端を発しています。

それからのち、【東京大学公開講座】として、第1回目が開催されたのは、昭和28（1953）年1月17日のことでした。そのことを伝える当時の新聞記事を見つけました。<広く一般にも東大の講義をちょっぴり聞かせようという初めての試み。各学部の'権威'9教授が動員されるとあって聴講申込は300人という盛況。下は18歳の女学生から、上は「東大の講義なら」とイの一番に申込んだ神田の農具屋さん（67歳）まで>（朝日新聞 1月18日付）

今から遡ること54年前になるわけですが、「この年に生まれたんだよ」という上司の声にビックリ。いぶし銀のその髪に、公開講座の歴史を重ねちゃいました！ いやいやそれよりも、初回から受講されている優等生がおられるのではないかと思うのですがいかがでしょうか？ 当時の様子やエピソードなどをお聞かせいただきたいものですが、まあさぞかし長〜いお噺になるのでしょうかなあ（笑）。

さて、開催時期は現行と変わらず、毎年春と秋の2回、それぞれ5日間で土曜日の午後が開講。ただ、第1回から第20回までは、総括テーマを決めず講義がなされていたようです。そして、昭和37（1962）年春の第21回目からは、<総合大学の公開講座にふさわしく、特定の問題をとりあげ、それを各専門分野から解明し、総合的な理解の方向を示唆する、という方針の決定>がなされ、そのスタイルは、現在まで受け継がれています。

歴史のある【東京大学公開講座】ですが、いまだご存じない方も多いようです。広報センターでも毎回、ポスターの掲示や聴講案内の配布を行っていて、ご来館者にお勧めしています。ただ、興味や関心はあっても、時間との折り合いがつかない方も少なくありません。ひとりでも多くの皆さんが、良い機会に恵まれますようにと願っています。

ところで、この公開講座は学外の方だけでなく、東大生や教職員の方々ももちろん受けられます！ ときには仕事を離れて、東京大学と向き合ってみるのも良いのではないのでしょうか。あらためて東京大学の学問を知ること、さらなる魅力を発見できるように思います。

\*参考文献：東京大学百年史『通史二』『部局史一』

\* 東京大学公開講座 お知らせページ  
[http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/d04\\_01\\_01\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/d04_01_01_j.html)



## 教育学部附属中等教育学校で3・4年生が1年間の総合学習の成果を発表

3月12日（月）に教育学部附属中等教育学校において、課題別学習発表会を行なった。課題別学習は本校で取り組んでいる総合的な学習の1つで、「農業に学ぶ」「身の回りの事柄を数学で考える」「漱石と鴎外」など15講座から生徒が1つ選んで受講する。

この発表会では3・4年生合同で受ける選択授業で1年間学んだ成果を講座ごとにポスター、口頭、演技などの発表で披露した。例えば「英語でミュージカル」ではミュージカルのいくつかの場面を演じたり、「日本の民俗芸能」では踊りを披露したり、「グローブ活動」ではポスター発表をしたりなど各講座の特徴を生かした発表となった。

参加した生徒たちは『「福祉環境を探る」の車椅子の解説を聞くと、健康な人にはわからないけれど、身近なトイレだけでも不自由なところがいっぱいあるんだと思った』『「NGO入門」の発表を聞いて、私たちはすごく恵まれているけれど、飢えや病気で苦しむ人々のために何かしなければと思った』と感想を書いている。



『日本の民俗芸能』で踊りを披露する生徒

(教育学部附属中等教育学校)

# INFORMATION

## シンポジウム・講演会

### シンポジウム・講演会

大学院総合文化研究科・教養学部

### 教養学部進学情報センター主催シンポジウム 「私はどのようにして専門分野を決めたか」

開催日時：4月27日（金）16時30分～20時

会場：駒場Iキャンパス教養学部18号館1階ホール

各学部の先生を講師にお招きし、先生方がどのようにして現在の専門分野を決められたか、また、その選択にどのような自分の夢を託されたか、などを自由にお話ししていただきます。4月という時期、前期課程の皆さんにとって「専門分野の決定」がもっとも関心が高いであろうという判断から、このシンポジウムを企画しました。大学で学ぶことの意味を問い直し、より広い視野のなかで進学を考える機会となってくれることを願っています。

先生方との質疑応答の時間も予定しています。ぜひ参加してください。講師の先生方の所属、氏名（専門分野）、演題は以下の通りです。

法学部 小西 敦 教授（公共政策学）

「“公”を考える」

医学部 宮川 清 教授（腫瘍学）

「医学とその周辺－多様な可能性」

工学部 保立 和夫 教授（電子工学）

「フォトニクスでセンシング」

文学部 塚本 昌則 准教授（フランス文学）

「文学は没落するか」

理学部 福田 裕穂 教授（生体制御学）

「ヒトはそんなに偉いのか－生命科学への道」

農学部 西澤 直子 教授（新機能植物開発学）

「世のため人のためを志して」

経済学部 松井 彰彦 教授（経済理論）  
「モノからヒトへ」  
教養学部 酒井 邦嘉 准教授（認知脳科学）  
「物理から脳、そして言語へ」  
教育学部 中釜 洋子 准教授（臨床心理学）  
「アイデンティティ探求を職業とする」  
薬学部 一條 秀憲 教授（細胞情報学）  
「歯科医に転身を決意させた“分子生物学”のダイナミズム」

\*シンポジウムの最後に進学情報センターより進学振分けの説明会を行います。

問い合わせ先 教養学部進学情報センター  
里見大作教授（内線 46187）



## お知らせ

キャンパス計画室

### 本郷キャンパス新通用門の名称について

本学は今年、本郷キャンパスにおいて3か所の通用門を整備する。キャンパス計画室では新通用門名称選考ワーキンググループ※により、3か所の通用門について、それぞれの名称を検討してきたが、以下のとおり決定したので報告する。

#### I 整備の概要

通用門A（本郷消防署脇通用門）：既存通用門の改修  
通用門B（総合研究博物館脇通用門）：新設  
通用門C（工学部5号館脇通用門）：新設

#### II 審議の経緯

平成18年12月末より平成19年1月11日（木）までWGにて審議を重ね、名称決定の手順と名称素案（門A：春日門、門B：懐徳門、門C：西片門）を決定、キャンパス計画室に報告し、了承された。平成19年1月24日（水）より同2月9日（金）まで素案を大学のHPで公開し、意見ならびに代案を求めたところ4件の投書があり、これらを踏まえ、同2月13日（火）から同3月1日（木）まで再度WGにて審議を重ね、Ⅲに示す名称を最終案として選考し、同3月2日（金）にキャンパス計画室において了承、決定された。

#### Ⅲ 名称

通用門A：春日門  
通用門B：懐徳門  
通用門C：西片門

#### Ⅳ 名称決定の理由

##### 通用門A（春日門）

方角を示すものとしての正確さを考えるなら「春日通り門」であるが、「春日」とくらべるなら「通り」をいれた時の言いにくさが残る。実際に名称が定着することを重視し「春日通り」に面した門という趣旨で「春日」が最適と判断した。またBと同様、名称が3文字となり他の門名称文字数と統一できる。

##### 【素案に対して寄せられた意見、代案についての見解】

方角を示すという点で誤解されやすいという指摘があったが、言いやすく定着しやすいことを重視し、素案が最適と判断した。「本富士門」、「理科（研）門」、「春木門」など他の代案は、主に門近傍の学外施設で使われ定着している、あるいは名称の由来がほとんど知られていないなど難点があると判断した。

##### 通用門B（懐徳門）

「懐徳門」は整備されるとストレートに現在の懐徳館表門に当たる。門自体、懐徳館の旧洋館レンガ造基礎を利用しデザインされている。「懐徳」はキャンパスの歴史に深く関係し、その由来の場所も含め永続すると考えられる。明治以前の門（鉄門も「復元」と考えると）がすべて2文字であるのに対し、「懐徳門」は3文字で明治以降整備された門名称を3字で統一できる。

##### 【素案に対して寄せられた意見、代案についての見解】

読みにくいという意見があったが、懐徳館の旧洋館レンガ造基礎を活用した門の名称として「懐徳門」より相応しい代案はなかった。代案は地下鉄路線名に由来する「大江戸門」の1件。

##### 通用門C（西片門）

門近傍の歴史的な地区名称に由来するとともに、門が開くおおよその方向を示すものとしてわかりやすい。なお門の設置場所町名は「本郷」となるが「本郷」は広域にすぎ、また「本郷通り」もキャンパスが接する距離が長く、門名称としては使えないと判断した。

##### 【素案に対して寄せられた意見、代案についての見解】

門近傍の歴史的な地区名称に由来するとともに、門が開くおおよその方向を示すものとしてわかりやすいと判断した。代案の「森川門」、「言問門」は、主に学外の特定施設の名称として使われ定着している、あるいは読みにくい言いにくいなどの難点があると判断した。

※新通用門名称選考ワーキンググループ

主査：岸田省吾（工学系研究科教授）、委員：小野塚知二（経済学研究科教授）、岸本美緒（人文社会系研究科教授）、木下直之（人文社会系研究科教授）、加藤道夫（総合文化研究科教授）

## お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

### 「教養学部報」第501（4月4日）号の発行 ——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

第501（4月4日）号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

小宮山宏：新入生に贈る言葉

——「総合知」を身につけよう——

小島憲道：東京大学教養学部の目指すもの

木村秀雄：ボリビアの井戸掘り

佐藤安信：三鷹市民と三鷹国際学生宿舎生との集い

教員紹介〈前編〉：

言語情報科学専攻／超域文化科学専攻／

地域文化研究専攻／国際社会科学専攻／

広域科学専攻＝生命環境科学系／関連基礎科学系

石垣琢磨：学生相談所スタッフから

里見大作：進学情報センター

山口和紀：情報教育棟

宮内由美子：留学生相談室より

兵頭俊夫：駒場図書館案内

池田信雄：美術博物館案内

石川 隆：保健センター駒場支所

事務部：教員組織・事務部

永田 敬：〈本の棚〉東京大学教養学部基礎生命科学実験  
編集委員会編『基礎生命科学実験』

辞典案内：

アルヴィ宮本なほ子：英語／鍛治哲郎：ドイツ語／坂

原茂：フランス語／安岡治子：ロシア語／西中村浩：

ポーランド語／村松真理子：イタリア語／竹村文彦：

スペイン語／木村秀雄：ポルトガル語／大貫隆：古典

語（ギリシア語・ラテン語）／吉川雅之：現代中国

語／野村剛史：国語辞典／齋藤希史：漢和辞典／生越

直樹：韓国朝鮮語／杉田英明：アラビア語／藤井毅：

ヒンディー語／高松洋一：トルコ語／中井和夫：ウク

ライナ語／柴宜弘：セルビア・クロアチア語／岩月純

一：ベトナム語／上村静：ヘブライ語／丸井浩：サン

スクリット語／前田君江：ペルシア語／王 嵐：台湾

語／木村理子：モンゴル語／吉川雅之：広東語／楊凱  
栄：上海語／高橋英海：シリア語（シリア・アラム  
語）

## お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

### スポーツ・トレーニング（実習）開講のお知らせ

教養学部では、専門課程の学生を対象としたスポーツ・トレーニング（実習）を下記の通り開講します。学部、学科を問わず専門課程および大学院の学生であればどなたでも他学部聴講として履修できます。この単位を卒業に必要な単位の一部として認定している学部は多くあり、例えば法学部では2単位まで認定されます。また大学院の修了単位にも認定されていますので、所属の学部、研究科に確認してください。

**科目名：**スポーツ・トレーニング

**開講学部：**教養学部

**単位：**1週1回90分1学期の授業で1単位を与える。

**開講曜限および場所：**

木曜3限（13:15～14:45）および4限（15:15～16:45）

に本郷御殿下記念館および御殿下グラウンドで行う。

金曜5限（16:20～17:50）に駒場テニスコートで行う。

**科目番号：**

905（木曜3限）、906（木曜4限）、907（金曜5限）

**本郷キャンパスでの開講種目と定員：**

3限（13:15～14:45）

ソフトボール 40名

バレーボール 40名

卓球 20名

バドミントン 40名

4限（15:15～16:45）

トレーニング\* 40名

バスケットボール 40名

\*マシンの使用を中心とした筋力トレーニング。受講によって御殿下記念館トレーニングルーム使用資格が与えられます。

**駒場キャンパスでの開講種目と定員：**

金曜5限（16:20～17:50）

テニス 20名

**ガイダンスおよび受講登録：**

本郷キャンパスでの開講種目については4月19日（木）それぞれの授業時間に法学部31番教室で行います。テニス（駒場）については4月13日（金）5限に教養学部身体運動科学棟会議室で行います。同一学期に2コマ以上履修することはできません。

問合先：

教養学部生命環境科学系 八田准教授（内線46862）

E-mail: hatta@idaten.c.u-tokyo.ac.jp

## お知らせ

附属図書館

### 総合図書館備付け図書の推薦について

総合図書館では、学生の学習・研究を助け、また教養をより豊かにするために、全学の教員（常勤講師以上）から図書を推薦していただく制度を設けております。

つきましては、平成19年度夏学期に向けて下記のとおり図書の推薦をお願いいたします。

1. 取りまとめ窓口 各部局図書館（室）

2. 推薦期限 4月27日（金）

なお、その他の図書の推薦は随時受け付けます。

3. 推薦図書の範囲

(1) 講義に密着した図書は、本郷キャンパスの講義を対象としています。

(2) その他、学生の教養書としてふさわしいものを推薦ください。

ただし、雑誌および学生にとってあまりに高度な専門図書、医学・薬学臨床系図書は除いてください。

4. 推薦方法

総合図書館備付け図書推薦要領によります。

※推薦要領は、各部局図書館(室)に備え付けております。

## お知らせ

情報基盤センター

### “情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを実施します。

本学にご所属であればどなたでも参加できます。

#### ●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー  
(定員12名 予約不要です。直接ご来場ください)

#### ●スケジュール：

5/11（金）15:00～16:00 日本の論文を探すには？

5/17（木）13:30～14:30

電子ジャーナルを利用するには？

5/23（水）11:00～12:00 自宅から検索するには？

<English Session>

5/22（火）15:00～16:00 Electronic Journals Course

#### ●コース概要：

<テーマ別ガイダンス>

1つのテーマに沿って、検索実習を交えながら解説します。

##### ■日本の論文を探すには？（60分）

FELIX、CiNiiの使い方を中心に、日本の論文・雑誌記事を検索できるデータベースを紹介します。

##### ■電子ジャーナルを利用するには？（60分）

電子ジャーナルを利用すると、読みたい論文をネットですばやく入手できます。

電子ジャーナルにアクセスする方法や、代表的な出版社の電子ジャーナルサイトを例にとって実際の利用方法を解説します。

##### ■自宅から検索するには？（60分）

学内・学外を問わず利用できる無料公開のデータベース・電子ジャーナルなどを紹介します。また、通常は学内からのみ利用可能なデータベース・電子ジャーナルでも、手続きをして学外から利用できるものがありますので、その方法を紹介します。

さらに、帰省先や海外で図書館を利用したい人向けに、他大学等の図書館を利用する際の手続き・注意点を説明します。

<Database User Training (English Session) >

##### ■Electronic Journals Course (60 minutes)

5/22 (Tue.) 15:00-16:00

This course covers the fundamental aspects involved

when consulting electronic journals. Explanations about the search functions of publishers such as ScienceDirect, SpringerLink and WileyInterScience can be tailored to include examples in your specific field of research.

●問い合わせ：

学術情報リテラシー係

03-5841-2649 (内線：22649)

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dlitc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

お知らせ

A G S 推進室

21世紀の地球環境を考えるサマースタッフYES2007のお知らせ

マサチューセッツ工科大学、スイス連邦工科大学、チャルマース工科大学、本学の間で、地球環境を維持しつつ人間活動の持続的発展をめざし国際協力を進めているA G S (Alliance for Global Sustainability) の環境教育部会では、下記の通り、サマースタッフ Y.E.S. (Youth Encounter on Sustainability) を、スイスおよびスロバキアの山荘にて開催します。

Energy, Technology, Food and Water, Social Issues の4つの観点から、話題提供、見学、討論、発表という手順で、持続性についての各自の考え方を深め、共同提案書づくりを目指します。

YESは2000年から昨年まで14回開催されていますが、2006年夏のセッションでは、今年と同様に3回開催され、それぞれのセッションともに、20か国以上から40名の学生と15名ほどの講師陣とで、ほぼ貸し切り状態の山荘で熱いディスカッションを繰り広げました。また環境に配慮した工場、直接民主主義制度の自治体、バイオ農場などの見学も行いました。

参加資格は、学部生(原則として4年生)および大学院生で、下記の各セッションとも上記4大学から合計で約20名と4か国以外の各国から約20名の計40名を予定しています。

本ワークショップの趣旨に賛同し、応募ご希望の方は、申込書に400語以内の英文エッセイを添えて、下記までお申し込み下さい。応募者多数の場合は、面接等による審査により決定させていただきます。

なお参加者は一人あたり1500USドル(航空運賃、滞在費、宿泊費を含む)の自己負担が必要です。本学学生諸君の多数のご応募をお待ちしております。

日程および募集人数：

7月セッション 7月6日(金)～23日(月) 4名

8月セッション 8月3日(金)～20日(月) 4名

スロバキアセッション

8月24日(金)～9月10日(月) 2名

(これらの前後に、移動日が必要です)

場所：

スイス連邦、ブラウンバルト

(7月セッションおよび8月セッション)

スロバキア、ズベレック(スロバキアセッション)

申込締切：4月13日(金)

(ただし、東京大学以外での募集とは、締切日が異なります)

詳細説明および申込書様式：

YES 2007 (本部)

<http://www.sustainability.ethz.ch/en/activities/yes-programs.cfm>

YES 2007 (東大)

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/aee-labo/YES>

問い合わせ先：

A G S 教育部会 山路永司教授

yamaji@k.u-tokyo.ac.jp

## 広報委員長の交代

平成19年4月1日付で、広報委員長が交代しました。新委員長、および退任した委員長よりご挨拶いたします。

### 広報委員長退任の挨拶

#### 「今後の広報活動の発展を願って」

##### 前広報委員長 高増 潔

昨年10月から半年間という短い期間ですが、広報委員長の仕事を無事に終えることができ、ほっとしています。もともと、広報の仕事とは縁がなく個人的な興味も素養もなかった私が大役を果たせたのも、広報委員会、広報課の教職員のご支援があったからだと思っています。

法人化から東京大学は広報の重要性を踏まえて、広報活動および組織の充実を行ってきたため、広報の体制は対外的な対応や危機管理を含めて、かなりしっかりしたものになっています。しかし、多くの教員、職員および学生から成り立っている東京大学では、常に事件が起こっています。テレビカメラが並ぶような記者会見も経験できました。よいニュースでも悪いニュースでも、東京大学が注目を浴びることは必然的なことであり、どんな状況にも対応できる体制ができていることは、大学として誇るべきことだと考えています。

対外的な広報活動のひとつとして、淡青19号を2月に発行することができました。これは、楽しかった仕事で、西郷和彦図書館長、樺山紘一先生、渡邊あゆみさんの特別対談をはじめ、東京大学が所有している貴重本である東大コレクション、史料編纂所の活動などのさまざまな分野における「本」の役割と、大学がどのようにして「本」と向き合っているのかについてご紹介いたしました。担当教職員の努力が実って、ビジュアル的にも読みものとしても、素晴らしい内容になったと自負しています。

しかし、東京大学の存在感は大学の中にいて感じるものと、学外において感じるものとは大きく違ってきます。最終的な広報の姿は、教員、職員、学生、卒業生それぞれが、日々の生活の中で、どれだけ東京大学に愛着と誇りを持っているか、いかに大学と社会と連携していくかによって成し遂げられるものだと思います。今後は、自分の研究、教育活動を通じて広報活動をサポートしていくとともに、今後の広報活動のさらなる発展を願って、退任の挨拶とします。

### 広報委員長就任の挨拶

#### 「広報委員長の就任にあたって」

##### 広報委員長 石見 徹

先日の会議で配られた資料によると、広報委員会および委員長を定めた規定は、昭和44年3月11日と日付けがありました。とすると、いわゆる紛争の最中に当りますが、実際に広報委員会の体制が動き出したのは、これより少し前です。というのは、安田講堂にニトログリセリンが運び込まれているとの噂をめぐって、初代委員長である経済学部の川田侃先生が、緊張した面持ちで記者会見されたことがある。新聞一面に大きく掲載されたその場面の写真を、今でもよく覚えているからです。「安田講堂にニトログリセリン」なんていっても、何のことがさっぱり分からない人が今やほとんどでしょう。それほど昔の話ですが、私がおの何十代目か後の委員長になるなんて、歴史を感じます。

実は、そんな昔に作られた規定がまだ残っていて、国立大学法人化した後にできた様々な制度と混ざり合っているのが現状です。現在は、広報委員長といっても、何が権限で、どんな責任があるのかよく分かってはいないのですが、以前あった委員長の役割は、広報担当の濱田純一副学長にほとんど引き継がれていて、私はその補佐役というのが実状だろう、と考えています。何が仕事の範囲かという詮索はともかく、広報活動全般に関して、取り組むべき課題を思いつくままに挙げてみましょう。一つ目は、外向けの広報です。要するに、東大の活動や目標を広く世間に訴えていくことですが、その内容は、すでにアクションプランにまとめられているといってもよいかもしれません。個人的には、東京大学が目指すべき理想、あるいは夢を語る事ができないと、広報活動も生きてこないだろうと感じています。人それぞれの思いも込めて、アクションプランを生かしていくことが望まれるでしょう。

二つ目は、学内の意思疎通ですが、最近、学内向け広報の重要性を再認識しました。「学内広報」の「人と仕事」やコミュニケーション・センターの紹介などが意外に多くの人に読まれていることを知ったからです。そのほか、「淡青」などで、ふだん縁がない他部局の研究や様子を知ること、やや官僚的な言い方をすれば、帰属意識を高め、ひいては東大をよくしていくことにつながるでしょう。

三つ目は、リスク管理について、本学の先輩、諸先生方から時おりご心配の声が聞こえてきます。これは、広報活動の守備範囲を超えてしまう点も多くありますが、リスクが発生した時に、適切な情報を伝達することは、広報の重要な使命といえるでしょう。この方面で今後とも努力を怠るべきではないと、痛感しています。

# EVENT LIST

行事名	日時	場所	連絡先・HP等
理学部第11回公開講演会 「挑戦する理学～自然の謎に迫る～」	4月20日(金) 18:00～20:30 (17:00開場)	駒場キャンパス 数理科学研究棟大講義室	大学院理学系研究科・理学部 Tel: 03-5841-7585 E-mail: shomu@adm.s.u-tokyo.ac.jp
第15回講演会 光触媒研究講座 「光触媒研究・技術発展の歴史・現状・展望」	4月24日(火) 13:15～16:45	先端科学技術研究センター 4号館講堂(2階)	光機能材料研究会事務局 FAX: 03-5452-6593
第12回 ICUS オープンレクチャ	4月25日(水) 13:30～17:00	生産技術研究所 総合研究実験棟(An棟)2階 コンベンションホール	ICUS(アイカス) Tel: 03-5452-6472 Fax: 03-5452-6476 E-mail: icus@iis.u-tokyo.ac.jp
教養学部進学情報センター主催シンポジウム 「私はどのようにして専門分野を決めたか」 ※40ページ参照	4月27日(金) 16:30～20:00	教養学部18号館1階ホール	教養学部進学情報センター 里見大作教授(内線 46187)
行事名	開催期間	場所	連絡先・HP等
東京大学創立130周年記念特別展示 「東京大学コレクション—写真家上田義彦のマニエリスム博物誌」展	2月5日(月) ～4月27日(金)	総合研究博物館本館	総合研究博物館 TEL: 03-5777-8600/FAX: 03-5841-8451 E-mail: web-master@um.u-tokyo.ac.jp URL: <a href="http://www.um.u-tokyo.ac.jp/">http://www.um.u-tokyo.ac.jp/</a>
常設展示「(新制)東京大学総長著作展(1) —南原総長から向坊総長まで—」 ※1353号参照	3月1日(木) ～5月31日(木)	総合図書館3階ロビー	附属図書館 URL: <a href="http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/">http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/</a>
所蔵品展 「測る人・描く人」	3月24日(日)～ 5月31日(木)	駒場キャンパス 自然科学博物館	自然科学博物館 <a href="http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/index.html">http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/index.html</a>
創造の広場イタリア	3月24日(土)～6 月17日(日) 休館 日: 毎週火曜日 開館 時間 10:00～18:00	駒場博物館1階 美術博物館展示室	東京大学総合文化研究科・教養学部 美術博物館 〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 TEL: 03-5454-6139 FAX: 03-5454-4929
第3回 高齢者教室 (老後を迎えるにあたって起こり得る様々な問題につ いての、老年病の各専門分野の方々の講演) ※1352号参照	3月28日から6月13 日までの毎週水曜 日(4/4と4/11は休 み) 14:00～	東大病院 入院棟A 15階大会議室	東大病院老年病科 TEL: 03-5800-8652 担当 野村
春の公開講座「グローバルゼッション」	4月21日(土)、5月 12日(土)、19日 (土)、6月2日(土)	安田講堂	〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学総務部広報課内 財団法人 東京大学総合研 究会 電話 03-3815-8345(直通) E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp (問い合わせ専用) 申し込みメールアドレス: jukou@adm.u-tokyo.ac.jp
H19 医学共通講義7 神経科学入門	4月10日～火曜日 4限14:40～16:10	医学部教育研究棟13階 第6セミナー室	URL: <a href="http://square.umin.ac.jp/dcntky/Event.html">http://square.umin.ac.jp/dcntky/Event.html</a>
東京大学科学技術インタープリター養成プログラム社 会人向け講座	4月26日(木)、5月 10日(木)、5月24 日(木)、6月7日 (木)、6月21日(木)、 7月5日(木) 18:00 ～19:30	教養学部内で開催	科学技術インタープリター養成プログラム事務局 TEL & Fax: 03-5465-8828 URL: <a href="http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/adult_education.html">http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/adult_education.html</a>
“情報探索ガイダンス”各種コース ※43ページ参照	5/11(金) 15:00～ 16:00/5/17(木) 13:30～14:30 5/23(水) 11:00～ 12:00 <English Session> 5/22(火) 15:00～16:00	本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー	学術情報リテラシー係 TEL: 03-5841-2649 (内線: 22649) E-mail: literacy@lib.u-tokyo.ac.jp URL: <a href="http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html">http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html</a>
駒場IIリサーチキャンパス公開2007	5月31日(木)～ 6月2日(土)	駒場IIリサーチキャンパス	先端科学技術研究センター URL: <a href="http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp/ja/events/index.php#events104">http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp/ja/events/index.php#events104</a>

# Contents

## 特集

- 02 平成19年度役員の紹介
- 06 平成18年度卒業式
- 10 平成18年度学位記授与式
- 14 平成18年度第2回「東京大学総長賞」「総長大賞」授与式
- 18 130周年記念事業 知のプロムナード デザインコンペ

## NEWS

### 一般ニュース

- 20 部局長の交代

### 部局ニュース

- 27 地球観測データ統融合連携研究機構『第2回アジア水循環シンポジウム』の開催とアジアにおける「水」問題へのチャレンジ
- 28 大学院教育学研究科・教育学部 留学生懇談会（茶の湯とファッションショー）開催される
- 29 宇宙線研究所 重力波研究推進覚書締結シンポジウムの開催
- 29 大学院総合文化研究科・教養学部 第1回東京大学教養学部選抜学生コンサート ～東京大学創立130周年記念～を開催
- 30 大学院農学生命科学研究科・農学部 救急救命講習を開催
- 30 大学院総合文化研究科・教養学部 国際シンポジウム「国際標準の学部初年次教育実現へ向けて」開催される
- 31 大学院総合文化研究科・教養学部 FRESH START@駒場

### キャンパスニュース

- 33 学生部 第2次学力試験（前期日程）の合格者、同（後期日程）第1段階選抜結果の発表
- 34 学生部 第2次学力試験（後期日程）、外国学校卒業学生特別選考の合格者発表

※昨年度の記事については、当時のままの職名等で掲載しておりますのでご了承下さい。

## コラム

- 36 新連載 インタープリターズ・バイブル Vol.1
- 36 調達本部です 第25回
- 37 Flags ～returns～
- 38 Crossroad～産学連携本部だより～Vol.14
- 39 Relay Column「ワタシのオシゴト」 第11回
- 39 龍岡門横丁噺 第15回
- 40 噴水 教育学部附属中等教育学校で3・4年生が1年間の総合学習の成果を発表

## INFORMATION

### シンポジウム・講演会

- 40 大学院総合文化研究科・教養学部 教養学部進学情報センター主催シンポジウム「私はどのようにして専門分野を決めたか」

### お知らせ

- 41 キャンパス計画室 本郷キャンパス新通用門の名称について
- 42 大学院総合文化研究科・教養学部 「教養学部報」第501（4月4日）号の発行—教員による、学生のための学内新聞—
- 42 大学院総合文化研究科・教養学部 スポーツ・トレーニング（実習）開講のお知らせ
- 43 附属図書館 総合図書館備付け図書の推薦について
- 43 情報基盤センター 情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ
- 44 A G S 推進室 21世紀の地球環境を考えるサマールワークショップYES2007のお知らせ
- 45 広報委員長の交代

## 46 EVENT LIST

### 淡青評論

- 48 理想的な授業

◆表紙写真◆ 平成18年度学位記授与式の1コマ（6ページに関連記事）

## 編集後記

記念すべき新年度第1号の学内広報は、5本の特集や新連載コラムが加わり、全48ページとボリュームたっぷりです。そしてそれに比例して増えたのが、編集にかかる時間と締め切りに追われるストレスでした。今回は、私の短い編集経験の中で最も苦勞しただけに、思い入れもひとしおです。大学から旅立っていく学生にとって卒業式が一生の思い出になるように、この学内広報は私にとって忘れられない一冊になりそうです。（あ）



七徳堂鬼瓦

## 理想的な授業

昨年末の学内広報で学生生活実態調査の結果を読んだ。そして、授業に対する辛口のコメントが多いので驚いた。見方を変えれば、これは大学の授業に対する学生の期待の高さを示すものでもある。自分のことを思い出してみると、学部の講義に失望したという記憶もないが、かといって完全燃焼したという記憶も特になく、大学院に行けば完全燃焼できるかなと期待していた記憶がある。実際に大学院に行ってみると、授業にではなく自分に失望してばかりだったが、これは答えの分かってない問題に挑戦でき

る環境に恵まれて自分の無力さを自覚したからであって、その意味で期待以上であったといえる。

今、教える側になって、理想的な授業とは何かと考えてみると、やはり、答えの分かっていない問題を学生と一緒に試行錯誤しながら考える授業ではないかと思う。私がこれまでに関わった授業の中でこの理想に近いものは、地球惑星物理学科で行なわれている実験演習や、野外で地球物理観測を行なう全学ゼミだ。これらは、実験の系や実際の地球を相手にして、どんなデータをどう解析したらそれが理解できるかを試行錯誤しながら考えていく授業である。納得するまで時間に糸目をつけずに考えるのが理想的なので、時間と体力はいくらあっても足りない。合宿形式の全学ゼミでは、寝る時間も節約して深夜まで解析や議論を行なうので、帰るころには皆ヘトヘトになってしまう。

こう考えると、理想的な授業とは時間と体力をふんだんに使った贅沢な授業ということになるが、それは当然なのかもしれない。そういう授業ならば、教える側の価値観、すなわち、どんなことに時間をかける価値があると思っているのかということが、学生側に自然に伝わるからだ。大学の役割が多様化しすぎると、時間がなくなり、こういう贅沢は難しくなるのではないか。大学という場は、真に時間をかける価値のあるものには惜しげもなく時間を注ぐことができるような贅沢な場であってほしいと思う。

武井 康子（地震研究所）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。

No. 1355 2007年4月11日  
東京大学広報委員会

〒113-8654  
東京都文京区本郷7丁目3番1号  
東京大学総務部広報課  
TEL：03-3811-3393  
e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp  
<http://www.u-tokyo.ac.jp>